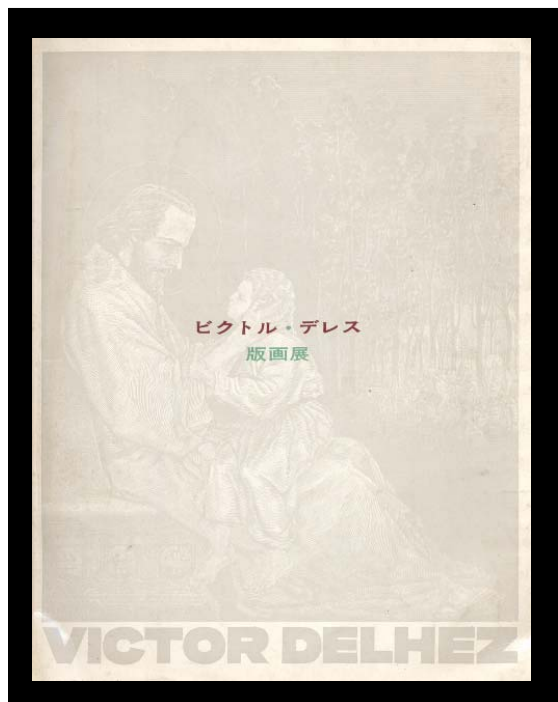




Catálogo de la exposición de grabados de Víctor Delhez en Japón, año 1965.



El embajador argentino doctor Guillermo Cano y su esposa, señora Sara Sztyle de Cano; la Princesa Imperial japonesa, Maurice Von Overivalle y el dueño del diario Mainichi Thimbu".

La muestra estuvo integrada con doscientos grabados. Fue organizada por la oficina de arte plástico del Tobu Departament Stores en Tokio y financiada por "Mainichi Shimbu", el diario más importante del Japón. La embajada de la Argentina en Tokio, que representa el doctor Guillermo Cano, le dispensó patrocinio.



Es gordum de 2 pull-overs: peso 66 Kg
como en Russia!
Estoy estudiando la Torre Babel
Arriba el mundo hueco + Hordigeriano
ambos de "Arg. y Noct."

紹介

ビクトル・デレスは日本においては余り知られない芸術家である。彼を単に版画家と呼ぶだけでは不十分である。版画にも種々の潮流がある。日本でも知名のフランダースのフランス・マゼレールも彼に劣らぬ版画家だが、デレスに比べると技術面に雲泥の差がある。両人の共通点は木に画を刻む点だけで、前者は白と黒との均衡に基づく画面を組むのであるが、デレスは各種の彫刻技術を駆使して、白と黒との間に広範囲のハーフ・トーンを表現する。

デレスとその作品を紹介するのを、無名の作家と作品を紹介すると誤解されるかも知れないが、彼は無名の版画家ではない。既に全世界の100以上の大都市で、彼の作品は公開され絶賛を受けている。1926年、アルゼンチンでの最初の展示、次いで、ボリビア、ベルギー、チリー、コロンビア、ウルグアイ、スイス、メキシコ、オランダ、アメリカ、スペイン、フランスに続いて日本でも公開された。後掲の表にもある通りで、この他にも、無数のグループ展にも出品された。彼には展覧会のために必要な宣伝組織も、時間もなかったが、それは、彼の作品の充実していることを示すもので、自ずと世間の人々の人気を集めたのである。

60年の間に、約数百点におよぶ木版、銅版とライノの大作を発表し、なおそのうえ大学で教鞭を執っていたことを考えると、彼が芸術作成以外に手を出す余裕がなかったのは当然である。

ビクトル・デレス略伝

デレスは1902年、ベルギーのアントワープで生まれ、父はスポーツホテルの経営者であった。アントワープの王立学術研究会で勉強すると共に、王立美術院で絵画と建築術を学んだ。卒業後同美術院のゴゴ画学アトリエに入った。風景を描き、フランドレンの古い建築物を模写したり、作詩に耽り、時には色彩に富んだ港町を散策した。1918年「フランダース人十頭」という題の10枚のライノ版画を作った。この作品に、すでにデレスの特異な才能を示している。第一次世界大戦直後、フランダースの若い版画家はマゼレールの指導のもとに団体を組織し、カントレー兄弟、テートガット、ヨーリス、ミネなどの芸術家が参加した。翌年デレスはハーボーゲンの造船所で、画家として働いていたが、この仕事は彼を満足させなかった。両親の許しを得て、ルーヴェン大学に入り4年後に技師となった。1年間兵役に服した後、家業を継ぎ、経営者となった。自動車販売修理工場も経営していたが、両親を自動車事故で失ってから彼の人生の苦悩の遍歴が始まった。ヨーロッパに興味を失い、南米に移住した。その頃、1925年、版画家の注目を集めた木版画集を出版した。

彼がブエノス・アイレスに着いた時、彼は無一文であり、頼りになる友人、親戚もなかった。職を求めて、大使館を訪れたが、大使館も彼の処置に困って帰国を勧めた。しかしデレスは帰国せず、独力で職を探した。港の一事務所に就職したり、ある時は画家として某建築家のスタジオで働いたり、バーの壁画を描いてみたり、時には農業会社に定款の制定を引き受け、あるいは、広い子供部屋の立体装飾を金持の建築家に依頼されたりして暮

していた。(この最後に掲げた子供部屋の装飾は、後にブエノス・アイレスの装飾芸術館に贈られた。)以後6カ月間広告業者に雇われ、しかも過大な労働に対して僅か5ペソの週給しかもらえなかった。広告用の小品を作っても、出版社は僅かな報酬しか払わなかったが、数年後にこの出版社は、彼の、四福音を主題とする数百点の版画の複写権には、気前よく、莫大な金を支払った。デレスは、木版の肖像を作りながらも、遂に自己の空虚な生活を高めることに成功した。

1930年ごろ、ボードレールの「悪の華」に挿絵を入れようと試みた。2年後、その挿絵の一部を展示した時、彼は素晴らしい才能ある版画家という名声を得た。それまでデレスは現代風の影響を受けていたが「悪の華」を契機として、現代風から脱却し、栄光への道を迎えるようになった。「悪の華」の版画の予約出版を企画したが失敗に終わった。アルゼンチンの建築家アチェヴェドの家の三階の装飾を依頼された。広大な邸宅の装飾には二年間もかかった。この仕事の直後「悪の華」の挿絵集を作った。1932年、第一集最初の30枚をブエノス・アイレスで出品した。赫々たる成功で直に美術院に招かれた。第二集、すなわち、次の30枚を出品した頃は彼はすぐれた芸術家と見做されていた。しかしデレスは冷静であった。自己の才能に満足しなかった。才能を伴わぬ名声が、いかに空しいものであるかを知っていた。隠遁するため、友人の招きに応じて、ボリビアへ移住した。以前から抱いていた大計画―福音書の挿絵―を完成するのに、ボリビアの風景、民俗ほど適した環境は他に求められないであろう。約百点におよぶ福音書の図解はデレスの生涯の夢の実現であった。1939年、メンドザの国立大学美術院の教授になったことは不思議ではない。世界的な巨匠デレスはアルゼンチンの中心で、無数の門弟を育て、南北アメリカのみならず、ヨーロッパにも彼のすぐれた技術を普及した。

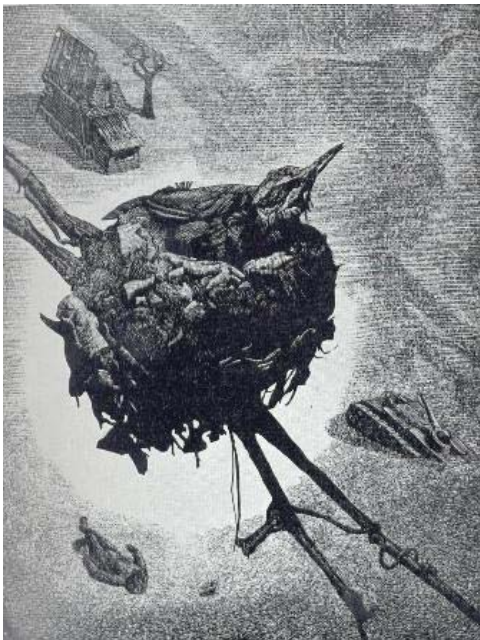
デレスの木造印刷機

デレスの用いる印刷機は独特のものである。彼自身が設計した。この設計を技師や、印刷師に示した時、彼らは異口同音に、その機械的能力や、仕上りの貧困さを理由に反対したが、デレスは頑強に自己の案に固執して、遂に村大工の協力の下に木造の印刷機を作り上げた。しかもその結果は人々の期待を裏切って、素晴らしいでき栄えであった。木造印刷機の優れた点は、弾力性に富む点である。しかし、木造であるから狂いもできやすいし、印刷するには大きな圧力を要するから、補正の必要もある。それで彼は補正する方法も案出した。曲った版の印刷も研究した。そうして生まれたのが「弾性地」と「局部圧」の新しい二原則である。デレスの印刷機を試みた印刷師は、その機械の能率の素晴らしいのに驚いた。この機械の話しを伝え聞いたベルギーの一印刷師は、損傷した版をデレスの許に送ってきた。デレスは苦もなくそれを印刷したのである。今日に到るまで、デレスの木造印刷機は一つの欠点もなく用いられている。

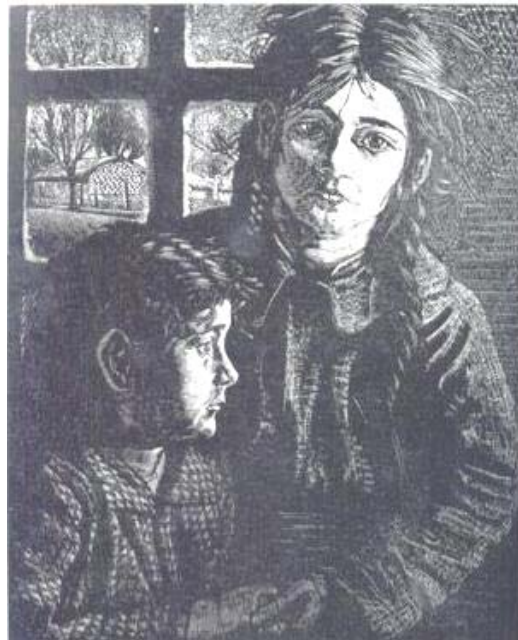


99 御昇天 Ascension

256 自画像 Self-portrait (前ページ)



164 冬 (1943) Winter



232 姉妹 (1938) Two little sisters



248 カストロ Castro



1
お告げ
Annunciation



5
羊飼たちの星
The star of the shepherds



6
羊飼・博士らの礼拝
Adoration



8
エジプトへの避難
Flight to Egypt



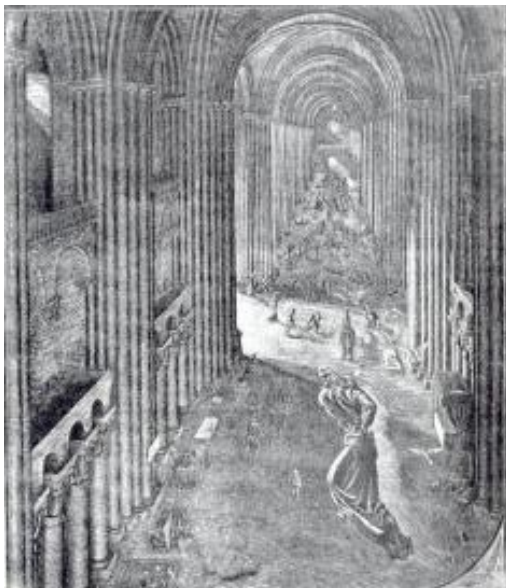
9
幼児らの殺害
The massacre of the innocents



13
「見よ、神の小羊を」
"Look, this is the Lamb of God"



16
最大の試み
The greatest temptation



20
 神殿より商人の追放
 First expulsion of the merchants from the Temple



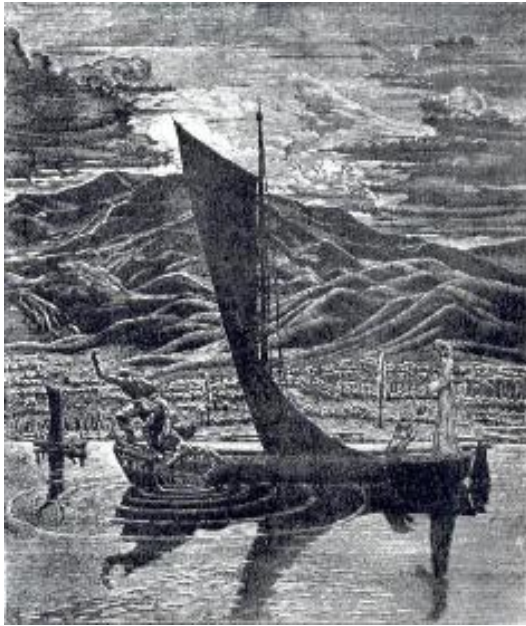
23
 サマリアの女
 The woman from Samaria



24
 百夫長の下僕いやされる
 Healing of the servant of the centurion



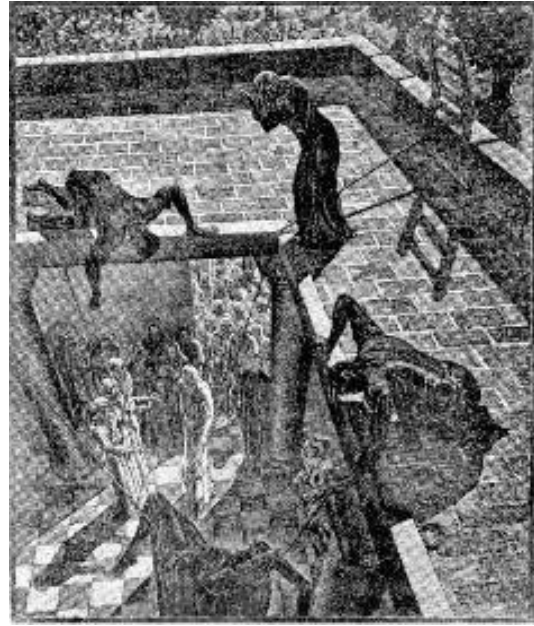
26
 悪魔つきがなおされる
 Expulsion of an evil spirit



28

奇跡の大漁

The miraculous draught of fishes



30

カファルナウムの中風者

Healing of the paralytic



32

手なえがなおる

Healing of the withered hand



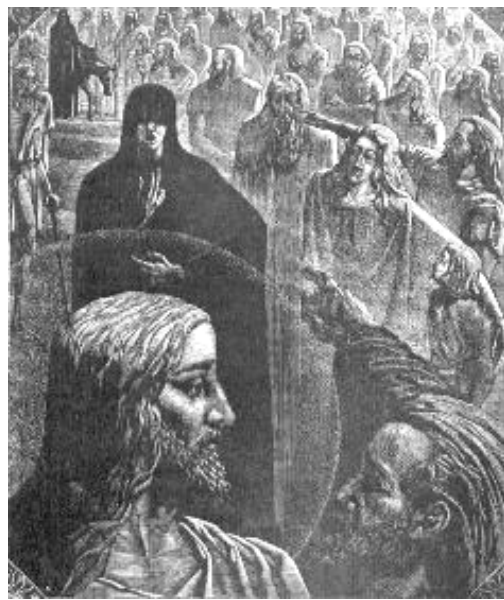
33

山上の説教

The Sermon on the Mount



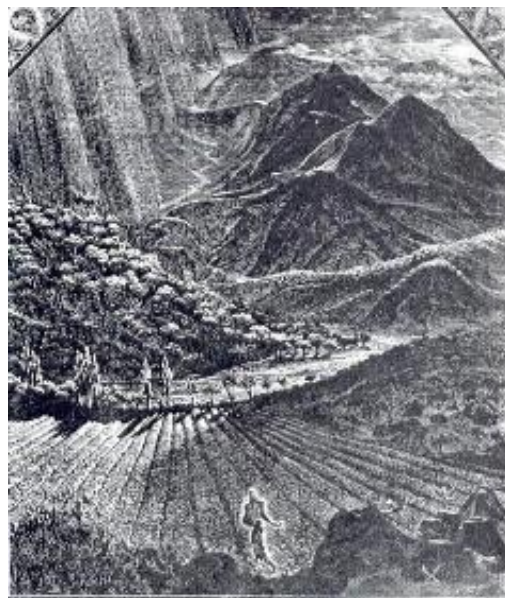
35
マゲダラのマリア
Mary Magdalen



37
イエズスの家族
The Mother and Brothers of Jesus



38
海辺の教え
Jesus preaching from the boat



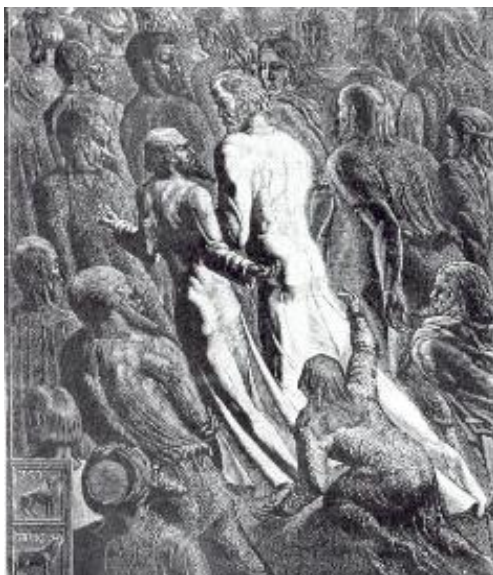
39
種蒔きのたとえ
Parable of the sower



43
しずめられた暴風
Jesus stills the sea



45
ヤイロの娘
Raising of the daughter of Jairus



46
出血症の女
The woman who touched the hem of the
Lord's cloak



47
最初のパンの奇跡
Multiplication of the loaves and the fishes



48

水上を歩む

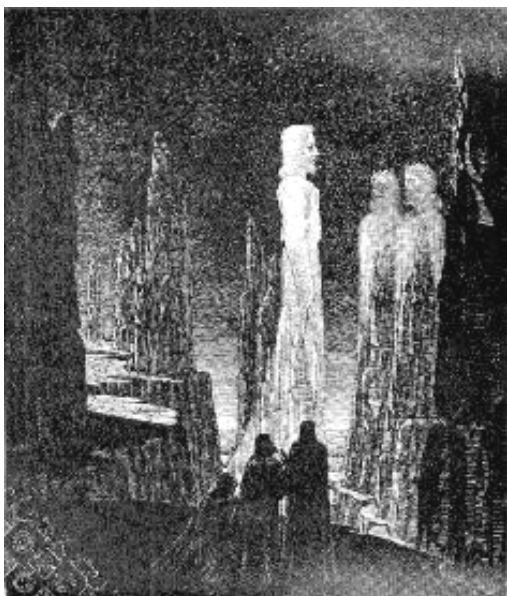
Jesus walks on the sea



50

生まれながらの盲人をなおす

Healing of the man blind from birth



52

変容

The transfiguration



59

よいサマリア人

The good Samaritan



60
主の祈り
The Lord's Prayer



61
ヨナのおしるし
The sign of Jonas



62
欲深い不正な金持
The foolish rich man



63
みのらないいちじく
Parable of the withered fig-tree



64

受難の預言

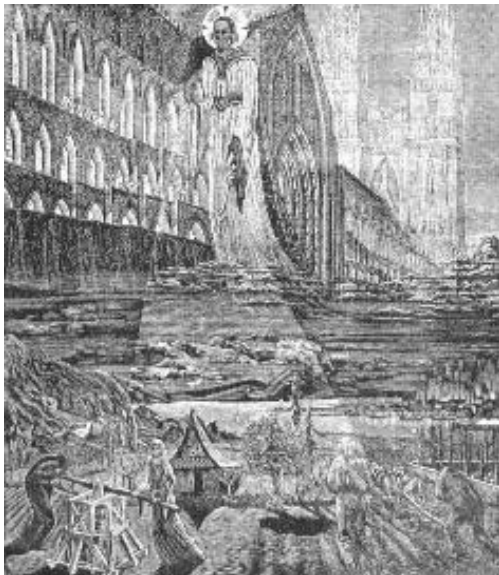
Going to Jerusalem



71

イエズスと幼児

"Unless you become like little children"



78

イエズスの来臨と警戒

The second coming of Christ



79

十人の乙女のたとえ

Parable of the ten virgins



80
最後の晩餐
The Last Supper



81
洗足
Jesus washes his apostles' feet



82
ゲッセマニにて
Gethsemane



87
むち打たれる
The scourging



94
御復活
Resurrection



96
マグダラのマリアへの出現
"Do not cling to me thus"



97
エムマウスの弟子たち
The disciples of Emmaus



99
御昇天
Ascension



100

聖霊降臨

The coming of the Holy Spirit



103

四騎士

The four horsemen



108

印された人々

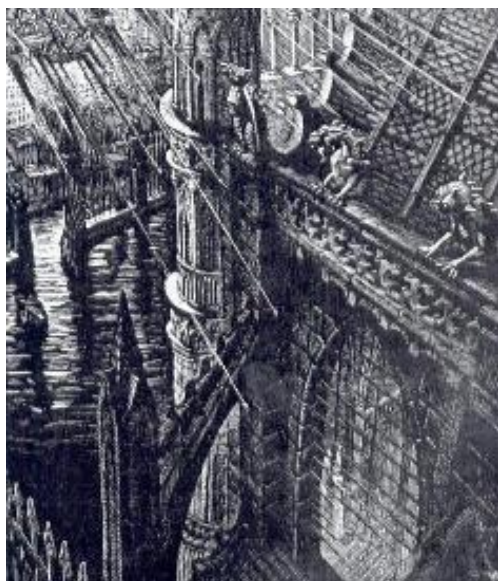
The 144,000 sealed



117

第五の天使ラッパを吹く

The fifth trumpet



120
そして私は杖のようなはかり竿を与えられた
The measuring of the temple



123
太陽に包まれた婦人
The woman in travail



124
天上の戦い
War in Heaven



125
大鷲の翼
The flight of the winged church



126

悪魔の挑戦

The diabolic trinity



132

第二の盃

The second cup



133

第二の盃

The second cup(continued)



137

第六の盃

The sixth cup



139

緋色の獣に坐る淫婦

The great harlot sitting on the scarlet beast



140

バビロンは悪魔と汚れた霊の住居となった

Babylon, abode of devils and unclean spirits



143

王の王

The white Horseman



151

無題 (1939)

Untitled



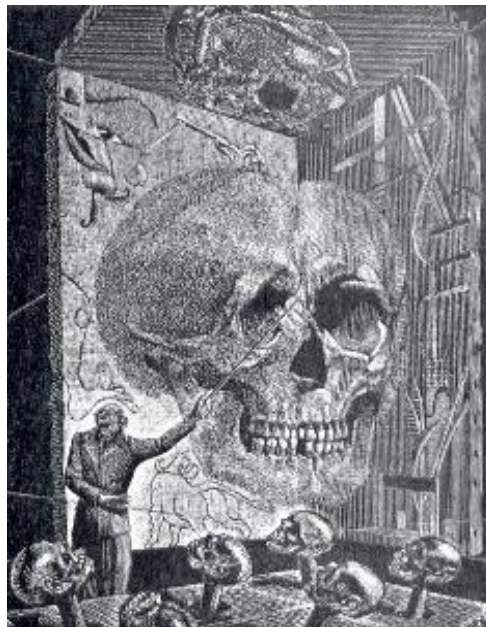
157
接吻 (1940)
The Kiss



160
“採用されなかった版画” (1941)
Rejected woodcut



163
死の舞踏のイントロダクション (1942)
Introduction to the Danse Macabre



178
N デイメンショナリズム (1955)
N dimensionalism



190
三人の盗人 (1952)
The three robbers



194
〈承前〉(1952)
Where you go to, and never come back from



207
A N III



215
国立博物館の立像の記念
Souvenir of the "National Museum of
Monuments"



219

天使像のある二階層の市街

Angel on a two-storied house



221

有史以前の交通

Prehistorical traffic



225

創作

Composition



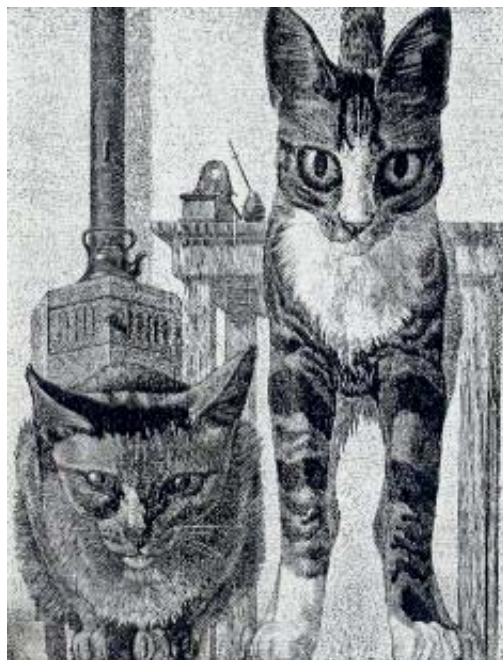
234

LとV (1943)

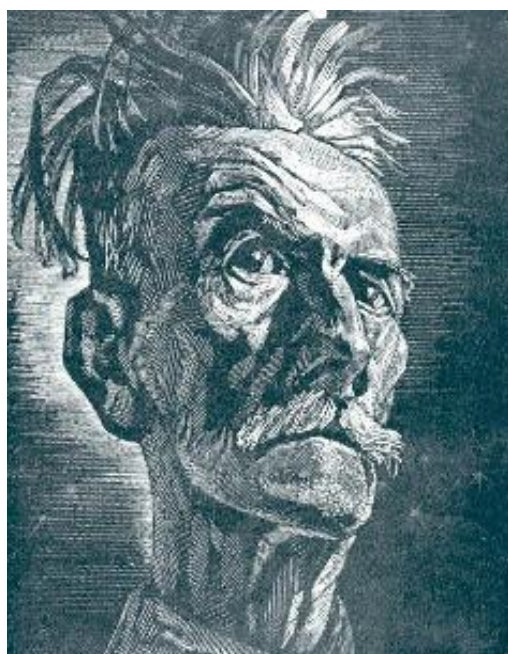
Liske and Victor



235
リスケ
Liske



237
ホセ・ルイスとセバスチャン (1944)
José-Luis and Sebastian



246
ドン・アロンソ (1949)
Don Alonso



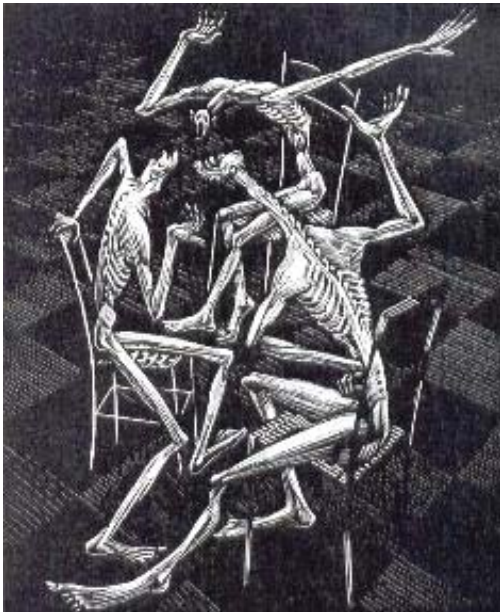
255
クラウディア (1957)
Claudia



276
ふくろう
Owls



280
情熱家の談話
"Triloquio appassionado"



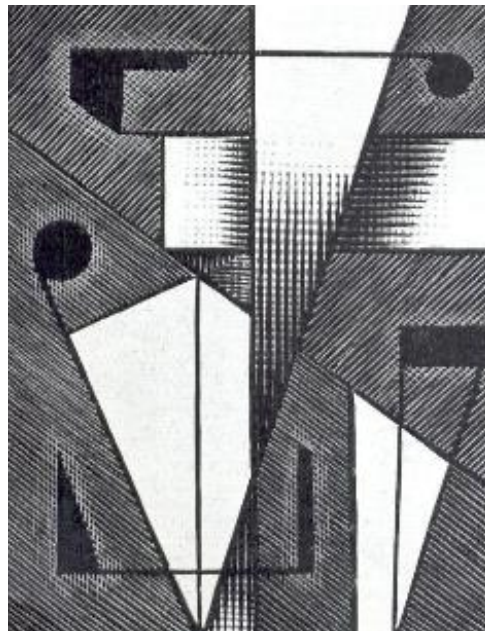
281
けんか腰
"Triloquio irracundo"



282
定義
Definitions



283
風景
Landscape



284
無拘束
Unconstrained



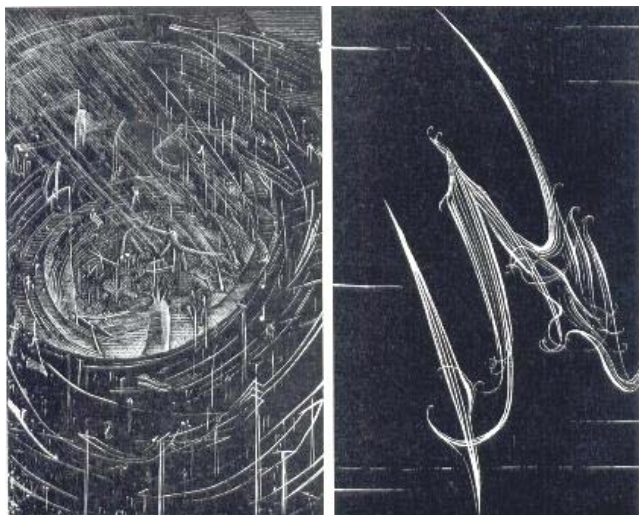
285
無題
Untitled



286
強壯劑
Tonic



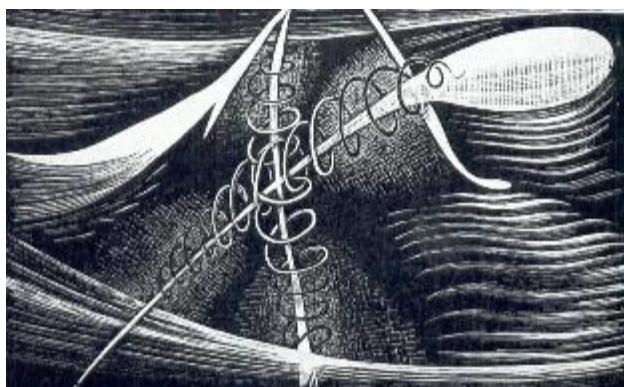
289
無題 2
Untitled 2



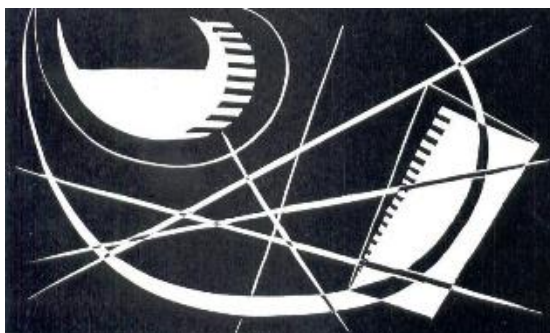
291
無題 3
Untitled 3



296
無題 8
Untitled 8



298
無題 10
Untitled 10



301
無題 13
Untitled 13



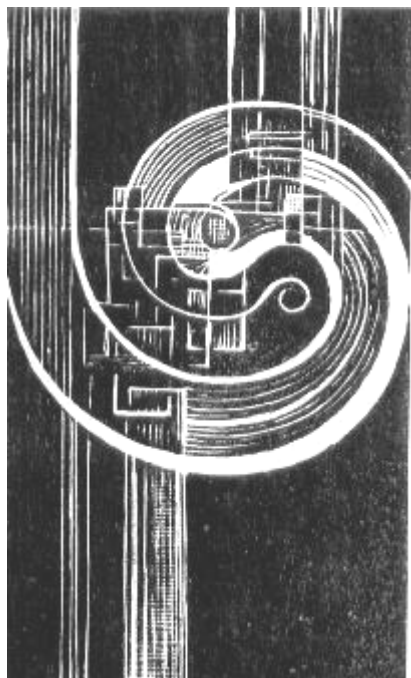
302
無題 14
Untitled 14



306
無題 17
Untitled 17



314
御降誕
Christmas



318
無題 22
Untitled 22



331
猫
Cats

福音シリーズ Gospel—Series

“福音”という言葉は、“よい便り”“よろこばしいおとずれ”の意味で、新約時代においてはイエズス・キリストが行なった救済の宣教、またはその教えを指すのに用いられる。従って、イエズス・キリストの生涯、奇跡、教理を記す新約の四書が“福音書”と呼ばれるようになった。

1 お告げ Annunciation

「天使ガブリエルは、ガリラヤのナザレトという町の、マリアという乙女のもとに、神からつかわされた。天使はマリアのところにきて、『あなたに挨拶します、恩寵にみちたお方、主はあなたと共においでになります。(あなたは女の中で祝福された方です)』といったので、マリアはこれをきいて心乱れ、これは何の挨拶だろうと考えていると、天使は、『おそれるな、マリア、あなたは神の御前に恩寵をえたのです。あなたはみごもって子を生むでしょう。その子をイエズスと名づけなさい。それは偉大な方で、いと高きものの子といわれます。……そこでマリアは、『私は主のはしためです。あなたのお言葉のとおりになりますように。』と答えた。』(ルカ 1・26—38)

2 訪問 Visitation

「そのころ、マリアは、山地のユダの町に、急いで出発し、ザカリアの家にいって、エリザベットに挨拶した。』(ルカ 1・39—40)

3 洗者ヨハネの誕生 Birth of St. John the Baptist

「さて、エリザベットは月みちて男子を生んだ。八日目になったので、人々は、その子に割礼をおこなうためにきて、父の名をとってザカリアと名づけようとしたが、ザカリアは書板をもってこさせ、『その名はヨハネ』と書いた。』(ルカ 1・57—63)

4 ヨゼフへの知らせ Announcement to St. Joseph

「突然、夢の中に主の天使があらわれて、こういった、『ダヴィドの子ヨゼフよ、ためらわずに、マリアをあなたの妻としてむかえよ。マリアは、聖霊によってみごもっている。彼女は子を生むから、あなたは、その子をイエズスと名づけよ。なぜなら、かれは、御民をその罪から救うお方だからである。』これらのことは、予言者によって主がおおせられた御言葉を実現するために起こったのである。『処女がみごもって、子を生むであろう、その名はエンマヌエルと呼ばれるであろう。』その名は、神はわれわれと

共においでになるという意味である。目ざめたヨゼフは、主の天使から命じられたとおりに、妻をむかえいれた。そして、マリアは子を生んだが、ヨゼフは彼女を知らなかった。かれは、その子をイエズスと名づけた。』(マテオ 1・20—25)

5 羊飼たちの星 The shepherds

「その地方に野宿して、夜、羊たちのむれを番する羊かいたちがいたが、主の栄光があたりをてらし、主の天使が近くにあらわれたので、かれらは大いにおそれた。すると、天使は、『おそれることはない、すべての人々のための大きなよろこびの知らせを、私はあなたたちに告げよう。今日、ダヴィドの町で、あなたたちのために、すくい主がお生まれになった、すなわち、主キリストである。あなたたちは、布につつまれてまぐさおけにねかせてある子どもを見るだろうが、それが、しるしである。』といった。するとたちまち、天の軍勢の大群が天使に加わり、『いと高き所には神に栄光、地には善意の人々に平和』と神を賛美した。』(ルカ 2・8—14)

6 羊飼・博士らの礼拝 Adoration

「羊かいたちは、『では、ベトレヘムに行って、主がお示し下さったそのできごとを見よう』と相談し、急いで、マリアとヨゼフと、まぐさおけにおかれた子供とを見に行った。羊かいたちは、天使が話したとおりのことを見聞きしたので、神をあがめ、たたえつつ帰って行った。』(ルカ 2・15—20)

「東の国の博士たちが、イエルザレムにきて、『お生まれになったユダヤの王さまはどこにおいでになるのか。われわれは、その星がのぼるのを見たので、おがみにきた』とたずねた。かれらがヘロデ王の言葉におくられて出発すると、何と、前にのぼるのを見たその星が先に立って、子供のおいでになる所の上にとどまった。星を見て大いによるこんだかれらが、その家に入って見ると、子供が母のマリアといっしょにおいでになった。そこでかれらはひれ伏して礼拝し、宝箱をあけて、黄金と乳香と没薬とのみやげものを献上した。』(マテオ 2・1—11)

7 イエズスは奉獻される Presentation in the Temple

「モイゼの律法にしたがい、かれらがきよめられる日になったとき、子供を主にささげるためにイエルザレムにつれて行った。イエルザレムには、義人で、敬謙で、イスラエルのなぐさめを待ちのぞんでいるシメオンという人がい

た。聖霊はその人の上にあった。かれは、聖霊によって、主のキリストを見ないうちは死なないと啓示されていたがこの時、霊にみちびかれて神殿にきていた。両親がその子イエズスをつれて、この子のために律法の慣習を行なおうとしてきたとき、シメオンはその子をだき、神を賛美した。」(ルカ 2・22—28)

8 エジプトへの避難 Flight to Egypt

「主の天使がヨゼフの夢にあらわれて、「起きて、子どもとその母親とをつれてエジプトに逃げよ。ヘロデが子どもをさがし出して殺そうと企んでいる。私が知らせるまで、その地にとどまっておれ」と告げた。ヨゼフは起きて、夜のうちに子どもとその母とをつれて、エジプトにのがれ、ヘロデが死ぬまでその地にとどまった。」(マテオ 2・13—15)

9 幼児らの殺害 The massacre of the innocents

「ヘロデは、ベトレヘムとその付近の地方にいる二歳以下の男の子を皆ごろしにしようとして家来をおくった。」(マテオ 2・16)

10 イエズスは神殿で見出される Finding in the Temple

「両親は、過越祭に、毎年イエルザレムに上っていた。イエズスが十二歳になった年に、習慣どおり祝日のために上京したが、祝日がおわって帰るとき、少年イエズスはイエルザレムにおのこりになった。両親はそれを知らなかったもので、道ずれの中にいるものと思っていたが、一日の道をおえてから、親戚知人の中をさがしてみた。見当らなかったで、二人はさがしながらイエルザレムにひきかえし、三日目に、神殿で、学者のなかにすわり、聞いたりたずねたりしておられるのを発見した。きいている人々は、その子の知恵と答えとを不思議がっていた。両親はこれを見ておどろき、『私の子よ、なぜ、こんなことをしたのですか？ ごらん、お父さんと私とは心配してさがしていたのですよ』と母がいうと、イエズスは、『なぜ私をさがしたのですか、私が、私の父の家にいるはずだと知らなかったのですか』とお答えになった。」(ルカ 2・41—49)

11 聖家族 The Holy Family

「イエズスは、二人にしたがって生活された。その母は、これらの記憶をみな心におさめておられた。そしてイエズスは、神と人との前に、その知恵も背丈も寵愛も、ますます増していられるのだった。」(ルカ 2・51—52)

12 洗者ヨハネ St. John the Baptist

「洗者ヨハネがきて、ユダヤの荒野で教えをのべ、『くい改めよ、天の国は近づいた』といった。かれは、預言者イザイアによって、『荒野に叫ぶ人の声、主の道を準備せよ、その小道を平にせよ』といわれていた人である。」(マテオ 3・1—3)

13 「見よ、神の小羊を」 “Look, this is the Lamb of God”

「二人の弟子といっしょにそこに立っていたヨハネは、イエズスが通りかかれるのに目をとめ、『神の小羊を見よ、』』といった。」(ヨハネ 1・35—36)

14 イエズスの洗礼 Baptism of Christ

「イエズスは洗礼をうけて、すぐ水からお上がりになった。すると天が開け、神の霊が鳩の形で下り、かれの上にくるのをごらんになった。そして、天から、『これは、私がよろこびとする愛子である』という声がした。」(マテオ 3・16—17)

15 イエズス試みられる Christ being tempted

「さて、イエズスは、悪魔にこころみられるために、霊によって荒野にみちびかれ、四十日、四十夜断食してのち、飢えを感じられた。すると、こころみる者が近づいて、『あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい』といった。そこで、『“人はパンだけではなく神の口から出る総ての言葉によって生きる”と書かれてある』』といいかえされた。また悪魔は、イエズスを聖なる都につれて行き、神殿の頂上に立たせて、『あなたが神の子なら、下に身を投げなさい。“神は、あなたのために天使たちに命じ、天使たちは、あなたの足が石に打ちあたらないように、手で支えるであろう”と書かれているのだから』』といった。イエズスは、『また、“あなたの神なる主をこころみるな”と記されてある』』とお答えになった。」(マテオ 4・1—7)

16 最大の試み The greatest temptation

「悪魔は、また、かれを、非常に高い山につれていき、世のすべての国とその栄華とを見せ、『あなたが、ひれ伏して私を礼拝するなら、これらをみなあなたに与えよう』』といった。そのときイエズスは、『サタン、しりぞけ、ぬ』“あなたの神なる主を礼拝し、ただ神にのみ仕えねばならぬ”と書かれてある』』とおおせられた。」(マテオ 4・8—10)

17 最初の弟子 The calling of the first apostles

「二人の弟子がついてくるのを、ふりむいてごらんになったイエズスが、『何をのぞむか?』とおたずねになると、二人は、『ラビーこれは“先生”の意味である、あなたはどこに泊っておられますか?』といった。イエズスは、『きてごらん』とおおせられた。」(ヨハネ 1・38—39)

18 イエズスの住い The house of Jesus

「かれらは、いっしょにいて、イエズスが泊っておられる所を見、その日はそこに とどまった。」(ヨハネ 1・39)

19 カナの婚宴 The wedding at Cana

「ガリラヤのカナに婚礼があったので、イエズスの母もそこにきておられた。イエズスも、弟子たちといっしょに、婚礼に招かれておられた。そのとき、婚礼のぶどう酒がつき、ぶどう酒がなくなったので、母はイエズスに、『あの人たちにぶどう酒がなくなりました』といった。イエズスは、『婦人よ、それが私とあなたとに何のかかわりがありましょう、私の時はまだきていません。』とおおせられたが、母は、下男たちに『何でも、あの人というおりにしなさい』といっておられた。そこには、ユダヤ人のきよめのために準備されている、三、四斗入りの石がめが六つあった。イエズスが、下男に『その石がめに水を一杯にしなさい』とおおせられたので、かれらが口まで一杯にすると、『それをくんで、宴会係にもっていきなさい』とおおせられた。かれらがもっていくと、宴会係は、ぶどう酒になったその水をなめてみて—かれは、それがどこからきたかを知らなかったが、汲んできた下男たちは知っていた—花むこをよび、『大ていの方は、先によいぶどう酒を出して、酔いのまわるころに下等なものを出すのに、あなたはよいぶどう酒を今までのこしておいたのですね』といった。これが最初の奇跡であった。」(ヨハネ 2・1—11)

20 神殿より商人の追放 First expulsion of the merchants from the Temple

「神殿の境内で、牛や羊や鳩を売っている人や、すわっている両替屋をごらんになったイエズスは、つなでむちをつくり、羊や牛をみな神殿からお出し、両替屋の金をちらして台をたおし、鳩を売る人々に、『これらをここから取りのぞきなさい、私の父の家を商売の家にしてはならぬ』とおおせられた。」(ヨハネ 2・14—16)

21 イエズスの御死去の預言 The 3 days of the Temple

「そのとき、ユダヤ人が、『こんなことをするからには、何かわれわれにしるしを見せてくれるでしょうか?』という、イエズスは、『この神殿をこわしたら、私は、三日でそれを建て直そう』とお答えになった。ユダヤ人は、『この神殿をたてるには四十六年かかったのに、あなたは三日で建て直すのですか?』といったが、イエズスがとおせられたのは、御自分の体である神殿のことであった。」(ヨハネ 2・18—21)

22 イエズスとニコデモ Jesus and Nicodemus

「ファリサイ人の中に、ニコデモという、ユダヤ人の貴人がいた。この人は、ある夜イエズスのところへきた。」(ヨハネ 3・1—2)

23 サマリアの女 The woman from Samaria

「サマリアのある女が水をくみにきたので、イエズスは『のませてください』とおおせられた。弟子たちは、食物を買いに町に行っていた。サマリアの女は、『あなたはユダヤ人なのに、サマリアの女の私にのませてくださいとおっしゃるのですか?』ときいた。ユダヤ人はサマリア人とつき合わないのである。『あなたが、神の恵みを知っている、のませてください』といっている人が誰かを知っていたら、自分の方からそうさせてくださいというにちがいない。そしてあなたは活ける水をもらったことだろう』とおおせられた。」(ヨハネ 4・7—10)

24 百夫長の下僕いやされる Healing of the servant of the centurion

「イエズスがカファルナウムにお入りになると、一人の百夫長がきて、『主よ、私の下男が家でねています。中風で大へん苦しんでいますので』といったのんだ。イエズスが、『私が行って、なおしてあげよう』とおおせられると、百夫長は、『主よ、私は、あなたを、うちの屋根の下にむかえる値打ちのない人間です。ただ一言おっしゃって下されば、うちの下男はなおるでしょう』。これをきいて感心なされたイエズスは、ついてきた人々に向かって、『まことに、私はいう、イスラエルの誰にも、私は、これほどの信仰を見たことがない』そして、百夫長に向かって、『行きなさい、あなたが信じた通りになるように』とおおせられた。下男はその時に病気がなおった。」(マテオ 8・5—8…10…13)

25 会堂での教え The sermon in the synagogue

「ナザレトに行かれたときのこと、いつものように、安

息日に会堂に入り、立って朗読しようとなさると、手渡されたのは預言者イザイアの手紙であった。その本をひもとくと、ちょうど、次のような箇所があった、『主の霊は私の上にある。なぜなら、私に油をそそいで聖別なされたからである。霊は、貧しい人々により便りをもたらし、とらわれ人に解放を、めくらに見えることを告げ、圧迫された人に自由をかえし、主の恩寵の年を宣言するために、私をおつかわしになった』。イエズスは、書を巻いて、係の人にかえしておすわりになった。堂内の一同がかれに注目していると、『あなたたちが今きいたこの聖書の言葉は、今日、実現した』とおおせられた。(ルカ 4・16—21)

26 悪魔つきがなおされる Expulsion of an evil spirit

「ちょうど会堂に、汚れた霊につかれた男がいて、『ナザレトのイエズスよ、あなたと私たちとに何かかわりがあるのか？ 私たちを亡ぼしにこられたか。私は、あなたが何者かを知っている、神の聖なる御方だ！』と叫んだ。イエズスは、『だまれ！この人を出よ！』とお叱りになった。すると汚れた霊は、その人をゆさぶり、大声をあげてでていった。人々はみな大いにおどろいて、『これは何だろう？権威のある新しい教えだ、それのみか、かれが汚れた霊にさえも命令すると、かれらはしたがう！』といい合った。(マルコ 1・23—27)

27 多くの病人がなおされる Healing of the sick

「夕ぐれになり、日がおちてから、人々は、病人や悪魔つきをみなつれてきて、町中の人々が戸の前に集まった。イエズスは、色々な病人を数多くなおし、多くの悪魔をおい出された。(マルコ 1・32—34)

28 奇跡の大漁 The miraculous draught of fishes

「シモンに『沖にのり出して、あみをおろして漁をなさい』とおおせられたので、シモンは、『先生、私たちは夜中はたらいで何一つとれなかったのです。けれども、お言葉ですからあみをおろしてみしましょう』と答えた。そしてその通りにすると、おびただしい魚がかかって、あみは破れそうになったので、魚を二せきの舟にあげた。(ルカ 5・4—7)

29 らい病人が治される Healing of the leper

「一人のらい病人がおそばにきてひざまずき、『あなたのおのぞみがあれば、私をおなおし下さることができません』と願った。イエズスはそれをあわれと思い、手をのばしてふれ、『私はそのぞむ、なおい！』とおおせられると、

ただちにらい病は去って、その人はなおった。(マルコ 1・40—42)

30 カファルナウムの中風者 Healing of the paralytic

「人々は、四人でになった中風の病人をつれてきたが、人が多くてみもとに行けなかったので、イエズスがおいでになった所の上の屋根をこわして穴をあけ、中風の人がねている床をつり下した。イエズスが、かれらの信仰を見て、『子よ、あなたの罪はゆるされた』と中風の人におおせられると、そこに坐っていたある律法学者たちが、『この人はなぜあんなことをいうのだろう。あれは、ぼうとくだ！神御一人以外に罪をゆるしうるものはない！』と、心の中でかみがえた。すると、イエズスは、かれらがそう考えているのをすぐ心に悟り、『なぜ、そんなことを考えているのか。中風の人に、“あなたの罪はゆるされた”というのと、“起きて、床をとって行きなさい”というのと、どちらがやさしいか。人の子が、地上で罪をゆるす権力をもっていることをあなたたちに知らせよう！』。そして中風の人に向かい、『私は命じる、起きなさい、床をとって家に帰りなさい！』とおおせられるや、病人は起きてすぐ床をとり、人々の目の前を出ていった。皆はおどろいて、神をあがめ、『今まで、こんなことを見たことがない！』といった。(マルコ 2・3—12)

31 マテオが召される The calling of the publican

「イエズスは、道すがら、マテオという人が、収税所にすわっているのを見て、『私についておいで』とおおせられた。その人は立ち上がってついていった。(マテオ 9・9)

32 手なえがなおる Healing of the withered hand

「イエズスが会堂に入って教えておいでになると、右手のなえた人がいた。律法学者とファリサイ人とは、訴えの口実を見つけようとして、イエズスがその人を安息日になおすかどうかとうかがっていた。その考えを見ぬいたイエズスは、手のなえた人に、『起きて、そこ、みなの前に立ちなさい！』とおおせられたので、かれは起き上がった。イエズスは、『私はあなたたちにきくが、安息日に善をするのと悪をするのと、命を救うのと亡ぼすのと、ゆるされているのはどちらか？』とおたずねになり、一同を見まわし、病人に『手をのばしなさい』とおおせられたので、かれがそうすると、その手はなおっていた。(ルカ 6・6—10)

33 山上の説教 The Sermon on the Mount

「イエズスが、山に登っておすわりになると、弟子たちは、おそばに近よった。イエズスは、話しはじめて、こうお教えになった。

“心の貧しい人は幸いである、天国はかれらのものである。”

“柔和な人は幸いである、かれらは地をゆずりうけるであろう。”

“苦しむ人は幸いである、かれらは慰めをうけるであろう。”

“義にうえかわく人は幸いである、かれらは飽かされるであろう。”

“あわれみのある人は幸いである、かれらもあわれみをうけるであろう。”

“心の清い人は幸いである、かれらは神を見るであろう。”

“平和のためにはたらく人は幸いである、かれらは神の子らと呼ばれるであろう。”

“義のために迫害される人は幸いである、天の国はかれらのものである。”（マテオ 5・1—10）

34 ナインのやもめ In Naim the widow's son is brought back to life

「イエズスが町の門に近づかれたとき、かつぎ出されてくる死人におあいになった。それはひとり息子で、その母親はやもめだった。町の人もおおぜい、その母親といっしょについてきていた。さて、やもめを見てあわれにお思いになった主は、『泣くではない』といい、棺に近づいて手をおふれになったので、かつぐ人も足をとめた。イエズスが、『青年よ、私がいう、起きなさい。』とおおせられると、死人は起き直って、ものをいいはじめた。」（ルカ 7・12—15）

35 マグダラのマリア Mary Magdalen

「あるファリサイ人が、いっしょに食事してくれるようにイエズスを招いたので、イエズスはそのファリサイ人の家に行って、食卓におつきになった。すると、イエズスが、ファリサイ人の家で食卓についておられるのを知って、その町で罪女とうわさのある女が、香油をいれたつぼをもって入ってきた。その女は泣きながら、イエズスの御うしろ、その御足の近くに立ち、涙で御足をぬらし、自分のかみの毛でそれをぬぐい、御足に接吻して、香油をぬった。これを見た招待主のファリサイ人は、心の中で、

『この人がもし預言者なら、自分にふれた女が何もので、どんな人間かを知っているはずだ、この女は罪人なのに。』』と考えた。イエズスは、女に向かって、『あなたの罪はゆるされた』とおおせられたので、列席の人は、『罪さえもゆるすこの人は何ものか』と心の中で思っていたが、イエズスは女に向かって、『あなたの信仰があなたを救った、安心していきなさい。』とおおせられた。」（ルカ 7・36—39…48—50）

36 マルタとマリア Martha and Mary

「みなは歩きつづけ、そしてイエズスがある村にお入りになると、マルタという女が、自分の家にイエズスをむかえ入れた。かの女にマリアという姉妹があったが、マリアはイエズスの足もとにすわって、お言葉をきいていた。もてなしに忙殺されていたマルタは、やがて足もとに近よって、『主よ、私の姉妹が、私一人にもてなしさせるのを何ともお思いになりませんか。この人に、私を助けるように命じて下さい』といった。すると、主は、『マルタ、マルタ、あなたはいろんなことを心配して心をつかっている。しかし必要なこととは少ない、いやむしろただ一つである。マリアは、自分からうばわれることのない、よりよい方をえらんだ』とお答えになった。」（ルカ 10・38—42）

37 イエズスの家族 The Mother and Brothers of Jesus

「イエズスが、なお群衆に話しておられると、その母と兄弟たちが、話そうとして外にきて立っていた。（ある人が、『ほら、あなたの母と兄弟とが、話そうとして外に立っておられます』といった。）イエズスはその人に向かって、『私の母とは誰のことか、私の兄弟とは誰のことか？』とおおせられた、弟子たちの方を手でさし示めて、『ごらん、これが私の母、私の兄弟である、天においてになる私の御父の御旨を果す人はみな、私の兄弟、私の姉妹、私の母である』とおおせられた。」（マテオ 12・46—50）

38 海辺の教え Jesus preaching from the boat

「イエズスが再び海辺でまた教えをのべられると、おびただしい人が集まってきたので、イエズスは舟を海にうかばせ、その中におすわりになった。人々はみな岸にそうて、海辺にいた。イエズスは、たとえをもって多くの事をお教えになった。」（マルコ 4・1—2）

39 種蒔きのたとえ Parable of the sower

『種まく人が種まきに出た。種をまくと、ある種は、道のかたわらにおちてふみつけられ、空の鳥についばまれ

た。ほかの種は岩の上におちて、生え出たけれど、水気がなかったので枯れてしまった。ほかの種はいばらの中におち、いばらが共に生え出たので、おおいふさがれてしまった。ほかの種は、良い土地におち、生え出て、百倍の実をむすんだ。こう話して、『聞く耳があれば聞きなさい。』と声高くおおせられた。弟子たちが、『そのたとえは、どんな意味ですか？』とたずねると、こうお答えになった、『あなたたちには、神の国の奥義を知る〔恵みが〕与えられたが、ほかの人には、見ても見ず、聞いてもわからないように、たとえて話すのである。たとえの意味はこうだ。種は神の御言葉である。道ばたのは、御言葉を聞いてのち、悪魔がきて、信じて救われることのないように、その心から御言葉をうぼうのである。岩の上のは、御言葉を聞いてよろこび受けても、根がないからしばらくの間信じるだけで、こころみの時には退く人々である。いばらの中におちたのは、御言葉を聞いても、次第に世の心労と富と快楽とにふさがれて実をつけない人々である。よい土地のは、寛大な良い心で御言葉を聞き、それを守り、しんぼうよく実を結ぶ人々である。』(ルカ 8・5—15)

40 よい麦と毒麦 Parable of the weed sower

「ほかのたとえをお話しになった、『天の国は、よい種を畑にまいた人ようである。人々がねむっている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った。芽が生え出てみると、毒麦もあらわれた。下男たちが主人のもとにきて、『御主人さま、畑におまきになったのは良い種でしたのに、それにどうして毒麦が出たのですか？』とたずねた。主人は、『敵がしたことだ』といった。下男たちが、『おのぞみなら、私たちがあれをぬきに行きましょうか。』という。主人は、『いや、毒麦をぬき集めようとして、よい麦もいっしょに抜くおそれがある。双方とも収かくの時まで育てにまかせておきなさい、収かくの時、私は刈る人に、先ず毒麦をぬき集めて焼きはらうために束ね、麦をあつめて倉におさめなさい、といおう』と答えた。』(マテオ 13・24—30)

41 かくれている宝 Parable of the hidden treasure

『天の国は、畑にかくされている宝のようである。宝を見出す人はそれをかくして大喜びで去り、もっているものを全部売って、その畑を買う。また、天の国は、美しい真珠を求める商人のようだ。価値の高い真珠一個を見つけると、もちものを全部売りに行き、それを買ってしまう。』

(マテオ 13・44—46)

42 審判のたとえ Parable of judgment

『天の国は、海に投げられて、いろいろなものをひろってくるあみにも似ている。それがいっぱいになると、漁師は岸に引上げ、すわって、よいものをかごに入れ、役に立たないものをすてる。世の終りにもそうなるであろう。天使たちがあらわれ、義人と悪人とに分け、悪人たちをもえさかるかまどに投げいれるだろう。そこには、嘆きとがみとがあろう。』(マテオ 13・47—50)

43 しずめられた暴風 Jesus stills the sea

「イエズスが舟におのりになると、弟子たちもついていた。すると突然、海がひどく荒れだし、舟は波にのまれそうになったが、イエズスはねむっておられた。弟子たちが近づいて起こし、『主よ、助けて下さい。』もう最後です。』といった。イエズスはかれらに向かって、『なぜ、おそれているのか、信仰うすい者よ』とおおせられ、起き上がり、風と海とをいましめられると、すぐ、大風になった。人々は感嘆して『この人は何だろう、風も海も服従しているこの人は。』』(マテオ 8・23—27)

44 ガダラの悪魔つき Expulsion of many unclean spirits

「イエズスが、向こう岸のガダラ人の地におつきになると、二人の悪魔つきが、墓から出てこちらにやってきた。この二人は非常に狂暴で、誰もかれらのいる道を通れないほどだった。そのとき、かれらは、『神の子よ、あなたはわれわれにどうなさるおつもりですか？ まだ時がこないのに、われわれを苦しめようとしてここにおいでになったのですか』と叫んだ。そこから程遠からぬ所に、豚の大群がかわれていたので、悪魔たちは、『あなたがわれわれを追い出すのなら、あの豚のむれの中に入れて下さい』とたのんだ。イエズスが『行け』とおおせられると、かれらは出て豚に入った。すると豚のむれはみな、崖から海にかけ下っておぼれ死んでしまった。牧人たちは逃げて町に行き、起こった一切のことと悪魔つきがなおされたこととを話した。そこで町はあげてイエズスを出むかえに行き、あうと、この地方から出て行って下さいとたのんだ。』(マテオ 8・28—34)

45 ヤイロの娘 Raising of the daughter of Jairus

「話しておいでになると、一人の司が近よってひれ伏し、『私の娘が、いま死にました。ですが、あの子のうえに、あなたの手をのべにおいで下されば、あの子は、生き

かえりましょう』といった。イエズスは立ち上がって、弟子たちをつれて司についておいきになった。さて、司の家についたイエズスが、笛吹きとさわぐ人々とをみて、『みんなさがりなさい。娘は死んではない、ねむっているのだ』とおおせられると、人々はあざ笑った。群衆を追い出してから、イエズスが入って、娘の手をおとりになると、娘は起き上がった。」（マテオ 9・18—19—23—25）

46 出血症の女 The woman who touched the hem of the Lord's cloak

「十二年前から出血症をわずらっていた女が、イエズスのうしろから近づいて、その御服の房にふれた。その御服にふれただけで、私はなおるにちがいないと心にいいかせていたからである。イエズスは、ふりかえって彼女を見て、『娘よ、信頼しなさい、あなたの信仰によってあなたは救われた』とおおせられた。女は、このとき治った。」（マテオ 9・20—22）

47 最初のパンの奇跡 Multiplication of the loaves and the fishes

「夕方、弟子たちがおそばにきて、『ここはさびしい所ですし、もう時もたちましたから、人々を去らせ、村にいったて食物を買わせて下さい』といった。イエズスは、『帰らせるには及ばない、あなたたちが食物をやりなさい』とおおせられた。弟子たちは、『私たちは、五つのパンと二ひきの魚しかもっていません』と答えた。イエズスは、『それを持っておいで』といい、人々を草の上に坐らせなさいと命じ、五つのパンと二ひきの魚とをとり、天をあおいで祝福し、パンをわって弟子たちにお渡しになったので、弟子たちがそれを人々に配った。みなは、それを満腹するまで食べた。」（マテオ 14・15—20）

48 水上を歩む Jesus walks on the sea

「夕方になったので、弟子たちは湖に下り、舟にのって、海の向う岸のカファルナウムに行こうとしていた。もう暗くなっていたのに、イエズスはまだかれらのところにおいでにならない。大風が吹いて、湖は荒れだした。かれらが四、五十町ほどこぎ出したとき、イエズスが海の上をあるいて舟に近づいて来られるのが見えたので、かれらがおそれていると、『私だ、おそれるな、』とイエズスがおおせられた。」（ヨハネ 6・16—20）

49 ベトサイダの中風者がなおされる
Healing of the sick at Bethsaida

「三十八年来病気になるやんでいる男がいた。その男がそこに臥せているのを見られたイエズスは、それもずい分前からの事だと知って、『なおしてほしいか？』とおたずねになった。病人は、『主よ、水が動くとき、私を水に入れてくれる人がありません。私が行こうとすると、ほかの人が先におりてしまいます』といった。イエズスは、『起きて、床をとりあげて歩きなさい』とおおせられた。するとその男はすぐなおって、床をとりあげて歩き出した。」（ヨハネ 5・5—9）

50 生まれながらの盲人をなおす Healing of the man blind from birth

「イエズスは、途中で生まれながらのめくらの男におあいになった。弟子たちが、『先生、この人がめくらで生まれたのは、誰が罪をおかしたからですか？ この人自身ですか？ それとも親ですか？』ときいた。イエズスは、『この人が罪をおかしたのでも親が罪をおかしたのでもない、ただこの人によって神のみわざをあらわすためである。私をおつかねしになったお方のみわざを、私たちはひるの間に行なわなければならない。夜がくれば、誰もは見えない。私が世にいる間、私は世の光である』とお答えになった。そして、土地につばをし、つばで泥をねり、その泥を男の目にぬって、『シロエー訳せば、つかわされたもののこと—の池へ行って洗いなさい』とおおせられた。その人が行って洗うと、はっきり見えるようになって帰ってきた。」（ヨハネ 9・1—7）

51 ペトロの信仰告白 The confession of Peter

「シモン・ペトロが、『主よ、私たちは誰のところにいきましょう、あなたは永遠の生命の言葉を有しておられます。また私たちは、あなたが、神の聖なるお方であることを、知りかつ信じています』と答えた。」（ヨハネ 6・68—69）

52 変容 The transfiguration

「六日ののち、イエズスは、ペトロとヤコブとその兄弟ヨハネをつれて、人里はなれた高い山にお登りになった。そして、かれらの前で御姿がかわり、御顔は日のようにかがやき、御服は光のように白くなった。そのとき、モイゼとエリアとがそこにあらわれ、イエズスと語りあった。」（マテオ 17・1—3）

53 てんかんをなおす Healing of the lunatic

「かれらが群衆の方に 帰ると、ある人がきて ひざまず

き、『主よ、てんかんにかかって重態になっている私の子をあわれんで下さい。私の子は何度も火の中におち、何度も水の中におれこみます。あなたのお弟子たちのところに連れてきてお願いしましたが、お弟子たちには治せませんでした』といった。イエズスは、『ああ、不信仰な墮落した人たち、私はいつまであなたたちといっしょにいないかならなければならないのだろうか、いつまであなたたちを忍耐しなければならないのか、その子を私のところに連れてきなさい』とお答えになった。イエズスが、悪魔をおどして御命令になったので、その時に、悪魔は去って、子供はなおった。(マテオ17・14—18)

54 共同の祈り “Whenever two pray together...”

『まことに私はいう、あなたたちのうちの二人が、この地上で、心をついて何かの願いごとをするなら、天におられる私の父はそれをかなえて下さるだろう。私の名によって二、三人が集まるところには、私もまたそこにいる。』(マテオ18・19—20)

55 姦淫の女 The woman caught in adultery

「律法学者とファリサイ人とが、姦淫しているときにつかまった女をつれてきて、皆の前に立て、イエズスに向かって、『先生、この女は、姦淫の最中につかまったものです。モーゼは、こういうものを石殺しにせよと律法で命じていますが、あなたはどう思いますか？』ときいた。そう言ったのは、イエズスを困らせて、訴えの種を見つけようとしたからだ。イエズスは、身をかがめて、地上に指でものを書きはじめておられた。かれらが問いつづけるので、身を起こし、『あなたたちの中で、罪のない人がまずこの女に石を投げなさい』とおおせられ、また身をかがめて地上に書きつづけられた。これを聞いた人々は、老人をはじめ、一人一人去っていき、やがて、イエズスと、中に立っていた女とだけが残った。イエズスが身をおこして、『婦人よ、かれらはどこにいったのか？ あなたを罪した人はいなかったか？』とおおせられた。女は、『主よ、一人も』と答えた。そこでイエズスは、『私もあなたを罰しない。行きなさい、これからはもう罰をおかさないように』とおおせられた。(ヨハネ8・3—11)

56 善い牧者 The Good Shepherd

「(人の子は、亡んだ人々を救うためにきた。)」『あなたたちはどう思うか、ここに百匹の羊をもっている人がいて、そのうちの一匹が群をはなれ去ったら、九十九匹を山にお

いて、いなくなったのをさがしに行かないだろうか？ そして、もしそれを見つけたら、まことに私はいう、迷わなかった九十九匹よりも、この一匹のことのほうを喜ぶだろう。それと同様に、天におられるあなたたちの父は、この小さなものの一人さえも亡びることを、おのぞみにならない。』(マテオ18・11—14)

57 イエズスに従うための覚悟 The scribe who followed Jesus

「そのとき、一人の律法学者が近づいて、『先生、どこにおいでになっても、私はあなたについて行きます』といった。イエズスは、その人に向かって、『狐は穴をもち、空の鳥はねぐらをもっているが、人の子には頭を休めるところもない』とおおせられた。(マテオ8・19—20)

58 小さな者の幸福 Jesus' call

「『労苦する人、重荷を負う人は、すべて私のもとに来るがよい、私は、あなたたちを休ませよう。私は、心の柔和な、謙遜な者であるから、私のくびきをとって私にならないさい。そうすれば、霊魂は休むであろう。私のくびきは軽く、私の荷は軽いからである。』(マテオ11・28—30)

59 よいサマリア人 The good Samaritan

「イエズスはおおせられた、『イエルザレムからイエリコに下ろうとするある人が、強盗にであった。強盗は、その人の服をはぎ、傷つけ、半死半生にしておいて、去っていった。たまたま、一人の司祭がこの道を下ってきたが、それを見ながら道の反対がわを通ってすぎ去ってしまった。また、レヴィ人も通りかかったが、それを見てもおなじように道の反対がわを通ってすぎ去ってしまった。ところが、旅の途中でそこを通りかかった一人のサマリア人が、それを見てあわれに思い、そばによって油とぶどう酒とを傷口にそそぎ、ほうたいして、自分ののりものにのせ、宿につれて行って介抱した。その翌日、宿の主人に二デナリオをわたして、“この人を看病して下さい、費用がかさんだら、私が帰るとき払いますから”』といった。あなたの考えでは、この人のうち、強盗にあったその人にとって隣人は誰だと思えるか？』とお問いになると、『その人をあわれんだ人です』と答えたので、イエズスは、『あなたもそういうふうにしなさい』とおおせられた。(ルカ10・30—37)

60 主の祈り The Lord's Prayer

「あなたたちはこう祈りなさい、『天にましますわれらの父よ、願わくは御名が聖とせられますように。御国がき

ますように。御旨が天に行なわれると同じく、地にも行なわれますように。私たちの日々のパンを、今日もお与え下さい。私たちが、負めをもつ人をゆるすように、私たちの負めをもゆるして下さい。こころみにあわせず、悪魔からお救い下さい。』」（マテオ6・9—13）

61 ヨナのしるし The sign of Jonas

「ある律法学者とファリサイ人とが、イエズスに向かって、『先生、私たちは、あなたがなさるしるしを見たいと思います』といった。イエズスはこうお答えになった、『この悪いよこしまな代よ、しるしをのぞむが、しかし、預言者ヨナのしるし以外のしるしは与えられないであろう。すなわち、ヨナは三日三晩、海の怪物の腹の中にいたが、同様に人の子は三日三晩、この中にいるだろう。審判の日、ニニヴェの人は、今の代の人と共に立ちあがり、今の代を罪に定めるだろう。なぜなら、かれらは、ヨナの言葉をきいて悔い改めたからである。しかも、ヨナにまさる者が、ここにいる。』審判の日、南の女王も、今の代の人と共に立ちあがり、今の代を罪に定めるだろう。なぜなら、女王は、サロモンの知識を聞こうとして、地の果からきたからである。しかも、サロモンにまさる者が、ここにいる。』」（マテオ12・38—42）

62 欲深い不正な金持 The foolish rich man

「たとえでお話しになった、『ある金持がいた。畑がゆたかに実ったので、その人は心の中で“さてどうしよう、作物をおさめる所がないが……”と考え、“ではどうしよう、倉をこわしてもっと大きいのを建て、そこにこく物と財産とをみなおさめよう。そして自分の靈魂に向かつて、靈魂よ、おまえはもうこれから長い年月をすごせる多くの財をたくわえたから、休め、飲め、食べよ、楽しめ”』といった。ところが、神は、その人に、おろかな者よ、あなたの靈魂は、今晚よびもどされるのだ。すると、あなたのたくわえたものは誰のものになるのかとおおせられた。自分のために財をつんでも、神のために財をつまない人は、この人と同じことである。』」（ルカ12・16—21）

63 みのならないいちじく Parable of the withered fig-tree

「『ある人が、自分のぶどう畑に、いちじくの木を植えていた。そこに実をさがしにきたがなかったので、ぶどう畑の小作人に、“私はもう三年も、このいちじくの実をさがしにきているが、ならない。切りたおしなさい、なぜ、土

地を無駄にとっているのか”』といった。すると小作人は、“御主人さま、今年もかんべんしてやって下さい、私がまわりを掘ってこやしをやります。そうすればいつか実をつけるかもしれません…。もしつけないなら切りたおして下さい”と答えた。』」（ルカ13・6—9）

64 受難の預言 Going to Jerusalem

「イエズスは、十二人の弟子をそばに呼んで、『私たちはイエルザレムに上る。人の子について、預言者たちが書きのこしたことは、みな実現するだろう。人の子は異邦人にわたされ、あざけられ、侮辱され、つばをかけられるだろう。そしてむち打ってかれを殺すだろう。そして三日目に、かれはよみがえる』とおおせられたが、弟子たちにはそれが何一つとしてわからず、その言葉はかれらにとってくらく、かれらにはその意味が理解できなかった。』（ルカ18・31—34）

65 神殿から商人を追出す

Jesus drives out the merchants from the temple a second time

「神殿に入ったイエズスは、神殿内から、売る人、買う人をみなおい出し、両替屋の机や、鳩売りの腰掛をたおして、『私の家は祈りの家といわれる』とかかかっているのに、あなたたちは、それを強盗の巣にするのか。』とおおせられた。』（マテオ21・12—13）

66 王の子の婚宴 The wedding feast

「『天の国は、自分の子のために婚宴をする王のようである。婚宴への招待者をむかえるために、王がしもべたちをおくったが、かれらは来ようとしなかった。そこで、ほかのしもべをおくって、“私は婚宴の準備をすでにととのえ、牛も肥えたけものをも屠って、準備したから、宴会にくるようにと、招待者たちにいいなさい”と命じた。ところが、人々はそれを気にもかけず、一人は自分の畑に、一人は商売に行ってしまった。またほかの一人はしもべたちをとらえて辱しめ、しかも殺してしまったので、王は怒って、軍勢をおくり、その人殺したちを亡ぼし、町をやきはらってしまった。それからしもべたちに、“宴会はすでに準備されたが、招待者は招待にふさわしくなかった。あなたたちは大路に行って出会う人をみな宴会に招いてきなさい”と命じた。しもべたちは出会う人をよいも悪いも集めたので宴席は客で一ぱいになった。客を見ようとして入ってきた王は、人が礼服をつけていないので、“友よ、あなたはど

うして礼服をつけずにここに入ったのですか？”ときくとその人は答えなかった。そこで王は給仕たちに、“この男の手足をしばって外のやみに投げ出せ、そこには嘆きとはがみとがあらう、／＼”といった。実に招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。』」（マテオ22・1—14）

67 放蕩息子のおとこ Parable of the prodigal son

『ある人に二人の子があった。弟の方が、“お父さん、財産の中で私のもらう分を下さい”と父にいったので、父は財産を二人に分けた。幾日もたたないうちに、弟は自分のものをみな集めて遠国に行き、そこで放蕩して、財産をつかってしまった。全部つかい果してのち、その国に大ききんが起ったので、かれも乏しさを感ぜはじめ、その地方のある人のところにやとわれに行った。するとその人は、かれを畑にやって豚を飼わせた。かれは、豚の食ういなご豆で腹をみたしたいと思ったが、誰もくれる人はなかった。そのときかれは、我にかえて、ひとりごとをいった、“父のところでは、十分にパンを食べているやとい人がたくさんいるのに、私はここで飢死しようとしている。私は出発しよう。父のところに帰って、お父さん、私は、天にそむき、そしてあなたにそむいて罪をおかしました。私はもうあなたの子と呼ばれる値打はないのです、どうぞ私を、やとい人の一人としてあつかって下さい、といおう”。そして、出発し、父のもとに帰った。まだ家から遠くへだたっていたのに、父親はかれをみつけて、あわれに思い、走りよってかれの首をだいて接吻をあげた。それから息子は、父に向かって、“お父さん、私は、天にそむき、あなたにもそむいて、罪をおかしました。（もうあなたの子と呼ばれる値打はありません）”といった。ところが、父は、しもべたちに、“すぐ、一番いい服をもってきてこの子に着せ、手に指輪をはめ、足にはきものをはかせなさい。それから、肥えた小牛をひいてきて殺し、それを食べて喜び合おう。私のこの子は、死んでいたのに生き返り、見失ったのに見出したからだ”といい、そしてかれらは祝宴をひらいた。さて、その兄の方は、畑に出ていたが、帰って家に近づくと、音楽やおどりの音が聞こえたので、しもべの人を呼んで、あれは何事だときくと、しもべは、“あなたの弟さんが帰られたのでお父さまが肥えた小牛を殺されたのです。弟さんが無事に帰られたものですから”と答えた。すると兄は、おこって、家に入ろうとしなかった。父がなだめに出てくると、兄は、父に向かって、“私は、何年もあ

なたに仕え、あなたの命令にそむいたことがないのに、その私には、友人と楽しむための小山羊一匹も下さいませんでした。それなのに、遊女といっしょに、あなたの財産をつかいはたしたあなたのあの子が帰ってくると、そのために肥えた小牛を殺されたのです、／＼”といった。そのとき父は“息子よ、あなたはいつも私といっしょにいたから、私のものはみなあなたのものだ。しかし、あなたのあの子は、死んでいたのが生き返り、見失ったのを見つけたのだから、祝い喜ぶのは当然なはずである”と答えた。』」（ルカ15・11—32）

68 十人のらい病 The ten lepers

『イエズスがある村にお入りになったとき十人のらい病人に出あわれた。かれらは、はなれた所に立ち止り、『イエズス、先生、私たちをあわれんで下さい、／＼』と大声でいった。かれらを見たイエズスは、『あなたたちの身体を、司祭に見せにいきなさい』とおおせられた。かれらは、そこに行く間になおった。その中の一人は、自分がなおったのを見ると、大声で神をたたえながら引き返してきて、イエズスの足もどにひれ伏して感謝した。これはサマリア人であった。イエズスは、『なおったのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この他国人のほかには、神をたたえるために引き返してきた人はないのか、／＼』といい、そしてその人に向かって、『立って行きなさい、あなたの信仰が、あなたを救った』とおおせられた。』（ルカ17・12—19）

69 ラザロと金持 Lazarus and the rich man

『緋色布や亜麻布を着て、日々おごり暮する金持がいた。また、ラザロという名の貧乏人がいた。全身はれものにうみだれたかれは、その金持の門前に横たわって、その食卓の残飯で飢えをしのごうと思っていた。その上、犬がよってきて、かれのはれものをなめるのだった。この貧乏人は、死んだとき、天使たちに連れられて、アブラハムのふところに入った。金持も死んでほうむられた。死人の国へ行つたかれは、苦しみの中から目をあげ、アブラハムとそのふところにいるラザロとをはるかにながめ、“父アブラハムよ、私をあわれみ、ラザロをおくって下さい。その指先を水にぬらして、私はほのおの中でもだえ苦しんでいますから、私の舌を冷させて下さい”と叫んだ。しかしアブラハムは、“子よ、あなたは生きている間によいものをもらい、ラザロが悪いものをもらっていたのを思い出しな

さい。いま、この人はここで慰めをうけ、あなたはもだえ苦しんでいる。そればかりか、私たちとあなたたちとの間には大きな淵があって、ここからあなたたちの方に渡れず、向こうからこちらにくることもできないようになって

いる」と答えた。すると金持は、また、“それなら、父よ、お願いですから、私の父の家にラザロをおくって下さい。私には五人の兄弟がいます、かれらもこの苦しい場所にこないように話させて下さい”といったが、アブラハムは、“かれらにはモイゼと預言者とがある。それを聞けばよい”と答えた。金持は、“いえ、父アブラハムよ、もし死者の中から誰かが兄弟の所に行けば、かれらは悔い改めるでしょう”といったが、アブラハムは、“モイゼと預言者とを聞かないなら、死者の中からよみがえる人がいても、かれらは説得されないだろう”と答えた。』(ルカ16・19—31)

70 フェリザイ人と税吏 Parable of the pharisee and the publican

「自分を義人と信じ、他人をさげすむ人々については、こんなたとえをお話しになった。『二人の男が、祈るために神殿に上った、一人はフェリザイ人で、一人は税吏だった。フェリザイ人の方は、こう然として心の中でこう祈った、“神よ、私が、他の人のように、貧欲な人、不正な人、姦通者でなく、またこの税吏のような人間でないことをあなたに感謝いたします。私は、週に二度断食し、全所得の十分の一をささげています”と。ところが、税吏は遠くにはなれ、目を天に向けることさえしえず、胸を打ちながら、“ああ神よ、罪人の私をおあわれみ下さい”と祈った。私はいう、この人は義とされて家に帰ったが、さきの方はそうではなかった。高ぶる人は下げられ、へりくだる人は上げられるのである。』(ルカ18・9—14)

71 イエズスと幼児 “Unless you become like little children…”

「そのとき、按手して祈って下さいといって、人々が子どもをつれてきたが、弟子たちがそれを押しとどめると、イエズスは、『子供たちをとめるな、私のところに来るのを邪魔するな、天の国は、このようなものたちのものだから』とおおせられ、かれらに按手してから、ここをお去りになった。』(マテオ19・13—15)

72 金持の若者 The rich young man

「ある人がよってきて、『先生、永遠の生命をえるために、私はどんなよいことをすればいいのでしょうか?』とた

ずねた。イエズスは、『なぜ、私に、よいことについてたずねるのか? よいお方はただひとりである。あなたが生命に入りたいのなら、掟を守りなさい』とお答えになった。その人が、『どの掟を?』という、イエズスは、『“殺すな” “姦淫するな” “盗むな” “偽証するな” “父母をうやまえ”』そして“隣人を自分のように愛せよ”』とお答えになった。若者が、『私は(小さい時から)それをみな守ってきました、その他に足りないことがあるでしょうか?』といったので、イエズスは、『あなたがもし完全になりたいなら、もちものを売りにいき、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天の宝をうけるだろう、それからきて、私に従いなさい』とおおせられた。この御言葉をきいて、若者は悲しそうに去っていった。かれは大へん財産家だったからである。』(マテオ19・16—22)

73 ラザロがよみがえる Resurrection of Lazarus

「イエズスは、ラザロの墓にいかれた。墓は洞穴で、前に石がおいてあった。イエズスが、『石をとりのけなさい』とおおせられた。死人の姉妹マルタは、『主よ、四日もたっていますから、くさくなっています』といったが、イエズスは『もしあなたが信じるなら、神の光栄を見よう』とあなたにいったではないか』とおおせられた。そこで、石がとりのけられた。イエズスは、目をあげておおせられた『父よ、私のねがいを書き入れて下さったことを感謝いたします。わたしは、あなたが常に私の願いを書き入れて下さることをよく知っています。しかし、私がこういいますのは、ここに取りかこんでいる人々のためで、あなたが私をつかわされたことを、この人たちに信じさせるためであります』そういつてのち、声高く、『ラザロ、外に出なさい』とおよびになった。すると死者は、手と足を布でまかれ、顔を汗拭きで包まれたまま出てきた。イエズスは人々に、『それを解いて、行かせない』とおおせられた。』(ヨハネ11・38—44)

74 司祭長らのはかりごと The annointment of Jesus

「イエズスが、ベタニアのらい病人シモン家で、食卓についておられると、ある婦人が、高価で純粋のナルド香油を入れた雪花石膏のつぼをもってきて、そのつぼをわって、イエズスの御頭に香油をそそいだ。するとある人たちがいきどおり、『何のために香油をこんなについやすのか、これを三百デナリオ以上に売って、貧しい人々に施すことができるのに』』といいあい、そして婦人にも不平をいっ

た。イエズスは、『打ちすてておきなさい。なぜこの人を
わずらわすのか、この人は私によいことをしてくれた。貧
しい人々はいつもあなたたちといっしょにいるから、いつ
でものぞみのままに助けてやることができる。しかし、私
は、いつもあなたたちといっしょにいるわけではない。こ
の人は、できるだけのことをして、私の体に香油をそそ
ぎ、あらかじめ、葬りの準備をしたのだ。まことに私はい
う、福音ののべられる所では、全世界のどこにおいても、
この人の行ないが記念として語りつたえられるだろう』と
おおせられた。』（マルコ14・3—9）

75 イエルザレムに歓迎 Jesus' entry into Jerusalem

「イエルザレムに近づいた時、イエズスは、弟子二人をつ
かひにやるに当って、『あなたたちは向こうの村に行きな
さい。すると、つないである牝ろばとその子とがいるのを見
つけるから、それをといて、私のところにつれてきなさい。
もし誰かが何かいったら、“主に入用です、すぐかえしま
すから”といいなさい』とおおせられた。こうなされたの
は、次の預言者の言葉、『シオンの娘にいえ、“あなたの王
がおおいでになる。めろばと、荷をになうけものの子のろ
ばにのった謙譲な人”』を実現するためである。弟子たち
が行くと、イエズスがお命じになったとおりだったので、
めろばとその子をつれてきて、その上に自分のマントをし
いた。イエズスはそれにお乗りになった。たくさんの人
が、道にマントをしき、あるいは木の枝を切って道にしい
た。また、イエズスの先に立ち、うしろに従う人々は、
『ダヴィドの子にホザナ、祝されよ、主の御名によって
来る者、天のいと高き所にホザナ』と叫んだ。』（マテオ
21・1—9）

76 チェザルへの税 Tribute to God and Caesar

「かれらは、イエズスをわなにかけようとして、ファリ
サイ人とヘロデ党の人々の中から何人かをイエズスのもと
におくった。かれらはきて、『先生、私たちは、あなたが
真実な方で、誰をもはばからないと知っています。人間の
位階を見ず、真理によって神の道を教えておられるからで
す。ところで、私たちがチェザルに税をおさめることは、
許されているのでしょうか、いないのでしょうか？また、
それをおさめなければならないのでしょうか、おさめなく
てもよいのでしょうか？』といった。そのずるさを知ったイエ
ズスは、『なぜ私にわなをかけるのか。そのデナリオをも
ってきて私に見せなさい』とおおせられた。かれらがもつ

てきたので、『これは、誰の像、誰の銘か？』とおたずね
になると『チェザルの』と答えた。そこで、イエズスは、
『チェザルのものはチェザルに、神のものは神にかえしな
さい。』とおおせられた、かれらは、これをきいて大いにお
どろいた。』（マルコ12・13—17）

77 イエルザレムに話す “Jerusalem, Jerusalem!”

『イエルザレム、イエルザレム、予言者たちを殺し、つ
かわされた人々を石で打つものよ、めんどりが、つばさの
下にひなを集めるように、私はいく度か、おまえの子らを
集めようとした、しかしおまえはこぼんだ。』あなたたち
の家はあれはてたまのこされるだろう。私はいう、“祝
されよ、主の御名によって来るもの。』とあなたたちがい
う時まで、もう私を見ないだろう。』（マテオ23・37—38）

78 イエズスの来臨と警戒 The second coming of Christ

『人の子の来臨は、ノエの時と同じである。洪水の前、
ノエが箱船に入るその日まで、人々は飲み、食い、めとり、
とつぎなどして、洪水が来てすべてを亡ぼすまで何も知ら
なかった。人の子の来臨もそれと同様である。その時、二
人の男が畑にいたら、一人がとられ、一人がのこされるだ
ろう。二人の女が臼をひいていた、一人がとられ、一人
がのこされるだろう。だから警戒せよ、あなたたちの主が
いつの日おいでになるかは誰にもわからないのだから。あ
なたたちにもわかることだが、主人が盗人の来る時間を知
っていたら、警戒して、住居の壁に穴をあけさせはす
まい。あなたたちも、思わぬ時に来る人の子のために用意
をしているがよい。主人が、時に応じて食物を与えさすた
めに、下男たちの上に立てた忠実なめけめのないしもべを
想像しなさい。主人が帰ってきたとき、そのようにしてい
るのを見られるしもべは幸いである。まことに私はいう、
主人は、その人にこそ自分のもちものを司らせることだろ
う。しかし、しもべが悪人で、主人はおそくしか来るまい
と心の中で考えて、仲間を打ち叩きはじめ、さけのみとい
っしょに飲食していたら、しもべの主人は、思わぬ日、思
わぬ時に来て、そのしもべをひきさき、偽善者と同じよう
にあしらうであろう、そこには、なげきとはがみとがあろ
う。』（マテオ24・37—51）

79 十人の乙女のたとえ Parable of the ten virgins

『天の国は、各自のともしびをとって、花むこをむかえに
出る十人の乙女にたとえてよい。その中の五人はおろか者

で、五人はかしこい。おろか者は、ともしびをとったが油をもたず、かしこい方は、ともしびといっしょに、器にいれた油ももっていた。花むこがおそかったので、みな、いねむりをして、そしてねてしまったが、夜半に、“さあ、花むこだ、出むかえよ、／＼”と声がかかった。乙女たちはみな起きて、ともしびをつけたが、おろかなほうが、かしこいほうに、“油を分けて下さい、私たちの火が消えかかっていますので”といった。かしこいほうは、“私たちとあなたたちとのためには、おそらく足りないでしょう、商人のところへ行って、買っていらっしゃい”と答えた。彼女たちが買いに行っている間に花むこが来たので、用意していた乙女たちはいっしょに宴席に入り、そして門は閉じられた。やがて、ほかの乙女たちが帰ってきて、“主よ、主よ、どうぞ開いて下さい、／＼”といったけれど、“まことに私はい、私はあなたたちを知らない、／＼”とお答えになった。だから警戒せよ、あなたたちは、その日、その時を知らないのだから。』”(マテオ25・1—13)

80 最後の晩餐 The Last Supper

「食事の間、イエズスは、パンをとって、祝して割り、それを弟子たちに与えて、『とって食べよ、これは私の体である』とおおせられた。また、杯をとって感謝し、かれらに与えて、『みな、この杯から飲みなさい。これは、多くの人のために、罪のゆるしを得させるために流す契約の私の血である。』”(マテオ26・26—28)

81 洗足 Jesus washes his apostles' feet

「過越祭の前に、イエズスは、この世から父のもとにうつるべき時が来たのを知り、この世にいる御自分の人々を愛し、最後までかれらに愛をお示しになった。食卓から立上がって、上衣をぬぎ、手拭をとって腰にまとい、それからたらいに水を入れ、弟子たちの足を洗い、まとった手拭でこれをふきはじめられた。シモン・ペトロの番になると、かれは、『主よ、あなたが私の足をお洗になるのですか？』ときいた。イエズスが『私のすることを、あなたは今は知らないが、後にわかるだろう』とお答えになると、ペトロは、『いいえ、決して私の足を洗わないで下さい』といった。イエズスが、『もしあなたを洗わないなら、あなたは私と何のかかわりもなくなる』とお答えになった。シモン・ペトロは、『主よ、では、足ばかりでなく、手も、頭も』といった。すると、イエズスは、『すでに体を洗った人は、(足のほか)洗う必要がない、その人は全身

きよいからである。あなたたちもきよい、しかし全部がそうではない』とおおせられた。イエズスは、自分を裏切る者が誰かを知っておられたから、全部がきよいのではないとおおせられたのである。かれらの足を洗い、上衣をとり、再び食卓につかれたときイエズスはおおせられた、『あなたたちは私を、先生または主という。それは正しい、そのとおりである。私は主または先生であるのにあなたたちの足を洗ったのであるから、あなたたちも互に足を洗いあわねばならぬ。』”(ヨハネ13・1—4—14)

82 ゲッセマニにて Gethsemane

「イエズスは弟子たちといっしょにゲッセマニという所に行き、弟子たちに、『私があそこへ行って祈っている間、あなたたちはここに坐っていないさい』とおおせられ、ペトロとゼベデオの二人の子をつれてそこに行き、うれしい悲しみにとらわれはじめ、『私の魂は、死ぬばかりに悲しんでいる。あなたたちはここにいて、私といっしょに目をさましていなさい』とおおせられ、すこし進んでひれ伏し、『私の父よ、できれば、この杯を私からとり去って下さい。しかし私の思うままではなく、御旨のままに、／＼』とお祈りになった。それから、弟子たちのところに帰って来られると、かれらがねむっているのを見て、『そんなふうにして、あなたたちは、一時間さえ私といっしょに目をさましておれなかったのか。誘惑におちないように、めざめて祈りなさい。精神は熱しても肉体は弱いものだ、／＼』とペトロにおおせられた。』”(マテオ26・36—41)

83 イエズスの捕われ The kiss of Judas

「十二弟子の一人のユダがきた。司祭長や人民の長老たちからおくられた多くの人々も、剣と棒をもってついてきていた。裏切者は、『私が口づけするのがその人だから、それを捕えなさい』と合図してあったので、すぐイエズスに近づいて、『ラビ、御挨拶申し上げます』といって口づけした。』”(マテオ26・47—50)

84 衆議所にひかれる Jesus sentenced to death

「人々はイエズスを捕えて、律法学士、長老たちが集まっていた大司祭カヤファの家にひいて行った。遠くはなれてそのあとにつきしたが、大司祭の庭にきたペトロは、成行きを見ようとして中に入り、しもべたちといっしょに坐っていた。司祭長たちと全議員とは、イエズスを死刑にするために、偽りの証拠を求めていた。たくさんの偽証人が来たが、証拠が上がらなかった。あとで二人の人がきて、

『この人は、“私は神殿をこわして三日でたて直せる”と
いっていました』といった。大司祭が立ち上がって、『この
人たちがあなたに対してする証拠に、何も答えないのか？』
とたずねたが、イエズスはだまっただままだった。大司祭は
また、『私は、活きる神によってあなたに厳命する、答え
てくれ、あなたはキリスト、神の子なのか？』といった。
すると、イエズスは、『その通りである。また私はいう、
人の子が全能者の右にすわり、天の雲にのって来るのを、
あなたたちは見るであろう。』とおおせられた。その時、
大司祭は自分の服を裂いて、『この男はぼうとくをいっ
た、どうしてこれ以上証人がいろう。あなたたちもいま、
ぼうとくを聞いたろう、どう思うか？』という、かれら
は『死刑に値する』と答えた。それから、かれらは、イエ
ズスの御顔につばをかけ、こぶしで打ち、あるいは平手で
叩いて、『キリストよ、預言してくれ、お前を打ったのは
誰だ？』といていた。』（マテオ26・57—66）

85 ペトロが否む Denial of Peter

「外で庭にすわっていたペトロのところに、一人の下女
が近づいて、『あなたもガリラヤ人のイエズスといっしょ
にいましたね』といった。そこでかれが、『私はそんな人
を知らない。』と強く誓いそして、のろいはじめた折から、
にわとりが鳴いた。ペトロは、『にわとりが鳴く前に、あ
なたは三度私をいなむだろう』といわれたイエズスの御言
葉を思い出し、外に出てはげしく泣いた。』（マテオ26・
69—74—75）

86 バラッパ Barabbas

「祝日のたびごとに、総督が人民ののぞむ囚人一人をゆる
すのが、例年のしきたりであった。そのころ、バラッパ
という有名な囚人が投獄されていた。総督が、『二人のうち
のどちらをゆるしてほしいか？』ときくと、かれらは『バ
ラッパを。』と答えた。ピラトが、『そうすると、キリス
トと称するイエズスをどう処置するか？』ときくと、皆は
『十字架につけよ。』と答えた。ピラトは、『あの人があ
んな悪事をしたというのか。』といったが、人々は『十字
架につけよ。』とますます叫び立てるばかりであった。』（マテオ27・15—16—21—23）

87 むち打たれる The scourging

「ピラトは、バラッパをゆるし、イエズスをむち打た
せ、十字架にかけるように、かれらにわたした。』（マテ
オ27・26）

88 嘲弄 The crowning with thorns

「総督の兵隊たちは、イエズスを役所につれていき、全
隊をよび集め、イエズスの服をはいで赤いマントをきせ、
いばらの冠をあんで御頭にかぶらせ、右の手に葦竹をもた
せ、その前にひざまずいて、『ユダヤ人の王さま、御挨拶
申しのべます。』とあざけり、また、つばを吐きかけ、そ
の葦竹をとって、御頭を打ち、嘲弄してからマントをはい
で元の服をつけさせ、十字架につけようとひき出した。』（マテオ27・27—30）

89 十字架の犠牲 The way of the cross

「出たとき、シモンというクレネ人にてであったので、十
字架をになわせようとして、その人を無理によびよせた。
ゴルゴタ、すなわち、されこうべという所につくと、イエ
ズに、胆汁をまぜたぶどう酒をのませようとしたが、イ
エズスはなめただけでお飲みにならなかった。』（マテオ
27・32—44）

90 苦しみの道 “Weep not for me…”

「多くの人々と、イエズスのためになげき悲しむ婦人た
ちがあとについていた。イエズスは婦人たちの方をふりむ
いておおせられた、『イエルザレムの娘たちよ、私のため
になくことはない、むしろあなたたちとあなたたちの子ら
とのために泣きなさい。』（ルカ23・26—32）

91 十字架 Crucifixion

「イエズスは十字架をにない、ヘブライ語でゴルゴタと
よばれる『されこうべ』というところに行かれた。かれら
は、そこで、イエズスを十字架につけた。』（ヨハネ19・
17—18）

92 御死去 Jesus hangs on the cross

「イエズスを十字架につけてのち、くじを引いてその御
服を分け、そのへんに坐って見張っていた。往来の人々
は、頭をふりながらのしった。十二時ごろから三時に至
るまで、地上一帯うすぐらくなった。三時ごろ、イエズ
スは、『エリ、エリ、レマ、サバクターニ。』と声高く叫
ばれた、それは、『私の神よ、私の神よ、なぜ私を見す
られたのか』という意味である。そのあたりに立っていた
人々のうち、これをきいて、『あの方はエリアを呼んでい
る。』といった人もあった。やがて、その中の一人が走りよ
って、海綿に酢をふくませ、葦竹につけてイエズスにのま
せようとしたが、他の人々は、『まて。』エリアが救いにく
るかどうかわ見よう』といった。イエズスは、ふたたび大声

に叫んで、そして息を引取られた。」（マテオ27・35—36…39…45—50）

93 葬り “...and they laid Him in a new tomb...”

「屍をうけとったヨゼフは、それを清い覆布でつつみ、岩に掘った自分の新しい墓におさめ、墓の入口に大きな岩をおいて帰って行った。」（マテオ27・57—66）

94 御復活 Resurrection

「主が御復活なさったとき、番兵たちはおそれおのいて、死人のようになった。」（マテオ28・4）

95 婦人たちは墓に詣でる The holy women at the tomb

「天使は婦人たちに向かって、『おそれることはない、私はあなたたちが、十字架につけられたイエズスをたずねてきたことを知っている。しかし、かれはもうここにおいではならぬ、お言葉どおり復活なさった。かれがおられたその場所を見にくるがよい。それからすぐ、弟子たちに知らせに行き、“かれは死者の中からよみがえられた、あなたたちに先立ってガリラヤに行かれるから、そこでお目にかかれるだろう”といいなさい』といった。」（マテオ27・5—7）

96 マグダラのマリアへの出現 “Do not cling to me thus...”

「マグダラのマリアが後をふりむくと、イエズスが立っておられるのが見えたが、それがイエズスであるとはわからなかった。イエズスは、『婦人よ、なぜ泣くのですか、誰を探しているのですか？』とおおせられた。彼女は、園の番人だと思ったので、『あなたがあの方を移したのなら、どこに置いたのかいって下さい、私が引取りますから』といった。するとイエズスは、『マリアム』とおおせられた。彼女はふりむいて、ヘブライ語で、『ラッブニ』—“先生”の意味—といった。そのときイエズスは、『私をそんなにとめてはいけない、私はまだ父のもとに上っていないからだ。兄弟たちの所に行って、“私の父、またあなたたちの父、私の神、またあなたたちの神のもとに私は上る”といいなさい』とおおせられた。」（ヨハネ20・14—17）

97 エムマウスの弟子たち The disciples of Emmaus

「二人の弟子が、田舎に行こうとする途中でも、イエズスががちがった姿でおあらわれになった。イエズスはいっしょにとまろうと家におはいりになった。かれらといっしょ

に食卓につかれたとき、イエズスはパンを取り、祝福をとなえ、それをさき、かれらにお与えになった。そのとき、かれらの目はひらけ、それがイエズスであったとわかった。」（マルコ16・12 ルカ24・29—31）

98 トマ Thomas in doubt

「イエズスがおいでになったとき、十二人の一人で、ディディモと呼ばれるトマは、みなといっしょにいなかった。ほかの弟子たちが、『主を見ました、／』とかれにいったが、しかしかれは『私はその手に釘のあとを見、私の指をその釘のあとに入れ、私の手をその脇に入れられないなら、信じられません、／』といった。八日ののち、弟子たちはまた家にいて、トマもいっしょにいたとき、戸は閉じてあったのに、イエズスがおいでになり、かれらの真中に立ち、『あなたたちに平安、／』とおおせられた。また、トマに向かって、『あなたの指をここに出し、私の手を見なさい、あなたの手を出して、私の脇におきなさい、信じない者でなく、信じる者になるように、／』とおおせられた。トマは、『私の主よ、私の神よ、／』と答えた。そのときイエズスは、『あなたは私を見たから信じたが、私を見ずに信じる人は幸いである』とおおせられた。」（ヨハネ20・24—29）

99 御昇天 Ascension

「それから、イエズスは、かれらをベタニアに連れてゆき、手をあげてかれらを祝福された。祝福しておられるうちに、かれらをはなれ、天にあげられていかれた。かれらは、イエズスの前にひれ伏してのち、非常な喜びをもってイエルザレムに帰り、絶えず神殿で、神をほめたたえていた。」（ルカ24・50—53）

100 聖霊降臨 The coming of the Holy Spirit

「五旬祭の日がきて、かれらがみないっしょに集まっていると、突然、天から、烈しい風が吹いてくるような音が聞こえて、かれらが坐っていた家にみち、火のような舌があらわれ、分かれて、おのおのの上にとどまった。すると、かれらはみな、聖霊にみたされ、霊がいわせるままに、いろいろの国の言葉で話しはじめた。」（使徒行録2・1—4）

黙示録シリーズ Apocalypse-Series

黙示録は元来象徴的な事物によってつづられたヨハネの預言書である。デレスは現代風の象徴と諷刺に溢れる作品を彫った。それぞれの作品の表現する現代的解釈を見る人

が下されるのも一興でしょう。

101 七つの教会へ送る手紙 Letters to the seven churches

「私、ヨハネは、神の御言葉とイエズスの証明とのためにパトモスという島にいたが、主の目に脱魂状態になり、後でラッパのような大声をきいた。その声は『あなたの幻視を書きしるして、エフェゾ、スミルナ、ペルガモ、ティアティラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオディキアにある七つの教会におくれ』といった。私はそう話した声を見ようとしてふり返って後を見ると、七つの金の燭台があった。そして燭台の間に、人の子のようなものがおられた。かれは長い服を着て、金の帯を胸に締め、その頭とかみの毛とは、純白の羊毛のように雪のように白く、その目は、もえるほのおのようであった。その足は、炉で精錬された貴い青銅のよう、その声は、大水の音のようであった。その右の手に七つの星をもち、その口から両刃の鋭いつるぎが出、その顔は、照りわたる太陽のようであった。それを見たとき私は、死んだようにその足もとにたおれた。するとかれは、右の手を私の上に置いていわれた、『おそれるな、私は、始であり、終りであり、生きているものである。私はかつて死んだが、世々限りなく生きる。私は死と冥府との鍵をもっている。だから、あなたが見たこと、今あること、のちに起こることを書きしるせ。あなたが、私の右の手に見た七つの星と七つの金の燭台との奥義は、次のとおりである。七つの星は七つの教会の天使であり、七つの燭台は七つの教会である。』(1・9—20)

102 礼拝 Adoration of the Lamb

「私は見た。天に一つの門が開かれて、先にきいた、ラッパのように私によびかけたその声が、『ここにのぼれ、私はこののち起こることをあなたに示そう』といった。玉座をめぐって二十四の座があり、そこに二十四人の老人が白い服をつけ、金の冠を頭にかぶって坐っていた。二十四人の老人は、玉座に坐るお方の前に平伏し、世々に生きるお方を礼拝し、玉座の前に冠を投出して、『われわれの神である主よ、あなたこそ光栄とほまれと力とを受けられるにふさわしい方です。なぜなら、あなたは万物を創られたからです。万物が存在し、そして創造されたのは、あなたの御旨によります』。また私は、一方玉座と四つの動物、また一方老人たちの間に、七つの角と七つの目のある屠られたような小羊が立っているのを見た。それは、全世界に遣わされた神の七つの霊である。かれが巻物を手にしたとき、四つ

の動物と二十四人の老人とは、小羊の前に平伏した。かれらは、新しい次の歌をうたっていた、『あなたは巻物をうけとって、封印を切るのにふさわしい方である。あなたは屠られて、その血によってすべての種族と言葉と人民たちと国々とから、神のために人々を贖ったからである。あなたはかれらを、われわれの神のために、地上を司る司祭の王国とされた。』(4・1—4—10—11—5・6—8—9—10)

103 四騎士 The four horsemen

「私は見た、小羊が七つの封印の第一のを切ったとき、四つの動物の一つが、雷鳴のような声で『近よれ』というのを聞いた。そして私は、白い馬があらわれるのを見た。乗っている者は弓をもっていた。この人に冠が与えられた。かれは勝利者として勝つためにでて行った。第二の封印を切ったとき、第二の動物が『近よれ』というのを聞いた。そしてもう一頭の炎のような色の馬がでてきた。それに乗っている者には、人間が互に殺しあうために地上から平和をうばいとる力が与えられ、大きな剣がわたされた。小羊が第三の封印を切ったとき、第三の動物が『近よれ』というのを聞いた。私は黒い馬があらわれるのを見た。それに乗っている者は、手に秤をもっていた。そして私は四つの動物の中から出る一つの声のようなものを聞いた。その声は『小麦五合五勺は1デナリオ、大麦一升七合は一デナリオ、酒とぶどう酒とは触れるな』といった。第四の封印を切ったとき、第四の動物が『近よれ』というのを聞いた。私はそして浅黄色の馬があらわれるのを見た。それに乗っている者は死とよばれ、冥府がそれにしたがっていた。かれらには、剣と飢とペストと地上の猛獣とをもって、地の四分の一を殺す力が与えられた。』(6・1—8)

104 祭壇の下に聖人 The fifth seal

「小羊が第五の封印を切ったとき、私は、神の御言葉のためと、また、自分たちがそれを証明したために殺された人々の靈魂を、祭壇の下に見た。かれらは大声に、『清いお方、真実の主よ、審判と、地上に住む人へのわれわれの血の復讐とを、あなたはいつまで延期されるのですか?』といった。そしてかれらのおのにおに白い服が与えられ、かれらと同じように死にわたされる下僕と兄弟との数が満たされるまで、もうしばらく忍耐するようにといい聞かされた。』(6・9—11)

105 祭壇の下に聖人(つづき) The Fifth seal (continued)

106 第六の封印 The sixth seal

「小羊が第六の封印を切ったとき、私は、大地震が起こるのを見た。太陽は荒い毛の布のように黒くなり、月は全面血のようになった。天の星は、いちじくの木が大風にゆられて、青い実を落すように、地に落ちた。天は、巻物を巻くように見えなくなり、すべての山と島とは、その場所から移された。地上の王、君主、千夫長、金持、勢力者、奴隸も自由民もみな、洞穴と山の岩間にかくれ、山と岩とに向かっていった、『われわれの上に落ちて、玉座に坐るお方の御顔と小羊の御怒りからわれわれを隠せ、その御怒りの大なる日はきた、誰がそれに耐えられよう。』」（6・12—16）

107 四位の天使 The four cardinal angels

「私は、地の四隅に立っている四位の天使が、地の四方の風を止め、地にも海にもどんな木にも風を吹かせないようにしているのを見た。また東からのぼるもう一位の天使を見た、かれは、活ける神の印をもっていた。」（7・1—2）

108 印された人々 The 144,000 sealed

「私は、神に印された人の数をきいた。それは、イスラエルの子らのすべての部族の中から、十四万四千人であった。」（7・4）

109 しゅろ The palms

「私は、すべての国と民族と人民と、言葉との、誰も数えきれぬおびただしい大群衆があらわれるのを見た。かれらは白い服をつけ、手にしゅろの枝をもち、王座の御前と小羊の御前に立ち、大声に叫んで、『救いは、玉座に坐るわれわれの神と小羊とのものである』といった。」（7・9—10）

110 静寂 A half hour of silence

「小羊が第七の封印を切ったとき、天はおおよそ半時ばかり静寂になった。」（8・1）

111 第七の封印を解く The seventh seal broken open

「もう一位の天使がきて、金の香炉をもって祭壇の前に立った。かれに沢山の香が与えられたが、それは、すべての聖人たちの祈りとともに、玉座の前の黄金の祭壇にささげるためのものであった。香の煙は、聖人たちの祈りとともに、天使の手から神の御前にのぼった。それから天使が香をとって、これに祭壇の火を盛って地に投げると、雷鳴、声、いなずま、地震がおこった。七つのラッパをもっていた七位の天使は、それを吹きならす準備をした。」（8

・3—6）

112 第一の天使ラッパを吹く The first trumpet

「第一の天使がラッパを吹きならした。すると、血のまじった雹と火とが地上に投げられた。地の三分の一は焼け、木の三分の一は焼け、みどりの草はすべて焼けた。」（8・7）

113 第二の天使ラッパを吹く The second trumpet

「第二の天使がラッパを吹きならした。すると、燃える山のような大きなかたまりが海に投げ入れられ、海の三分の一が血に変わり、海の中にいた生きものの三分の一が死に、船の三分の一がこわされた。」（8・8—9）

114 第三の天使ラッパを吹く The third trumpet

「第三の天使がラッパを吹きならした。すると天から大きな星がおちて、炬火のように燃え、川の三分の一と水の源とのおちた。この星の名は、苦よもぎといい、水の三分の一は苦よもぎにかわり、水が苦くなったので、多くの人が死んだ。」（8・10—11）

115 第四の天使ラッパを吹く The fourth trumpet

「第四の天使がラッパを吹きならした。すると、太陽の三分の一と月の三分の一と星の三分の一が打たれ、その三分の一が暗くなったので、昼の三分の一は光を失った。夜も同じである。」（8・12）

116 大鷲 The three "woe's" of the eagle

「一羽の鷲が中天を飛んで、大声にこういうのを聞いた、『三位の天使の吹きならそうとするラッパのこえがひびき渡るとき、地に住む者は、わざわい、わざわい、わざわい。』」（8・13）

117 第五の天使ラッパを吹く The fifth trumpet

「第五の天使がラッパを吹きならした。天から地におちた一つの星を見た。その星には深淵の穴の鍵が与えられた。深淵の穴がひらかれると、そこから大きな煙のけむりのような煙がたちのぼり、太陽と空は穴の煙のために暗くなった。この煙からいながが出て地上にひろがった。それらには、地上のさそりのもつような力が与えられた。そして、地の草、すべての緑のものとすべての木を害わず、ただ、額に神のしるしをもっていない人々だけを害うように命ぜられた。しかしその人々を殺すことはせず、五カ月のあいださそりに刺されたような苦しみをもって、その人々を苦しめる役が与えられた。そのとき人々は、死をもとめても見出さず、死をのぞんでも、死がかれらから逃げるで

あろう。そのいなごの形は、戦争のために準備された馬のようであった。頭には、金の冠のようなものをのせ、その顔は人間のようであった。その髪は女の髪のようにであり、歯は獅子の歯のようであった。その胸は鉄の鎧のようであり、その翼の音は、何頭かの馬のひく車が戦いにはせゆく音のようであった。また、さそりのような尾があり、そこに刺がついていて、それは五カ月のあいだ人間を苦しめる力をもっていた。かれらに王がいる、それは深淵の天使である。」(9・1—11)

118 第六の天使ラッパを吹く The sixth trumpet

「第六の天使がラッパを吹きならした。すると、神の御前にある金の祭壇の四隅から声が出るのを聞いた。その声は、ラッパをもっている第六の天使に、『大なるエウフラテス川のほとりにつながれている四位の天使をとき放て』といった。そして定めの時、日・月・年に至って、人間の三分の一を亡ぼすために準備されていた四位の天使がとき放たれた。この騎兵団の数は二億であった。私はその数を聞いた。私は幻視のうちに、馬とその騎兵を見たが、かれらは、火とヒヤシンスと硫黄との色をした鎧をつけていた。馬の頭は獅子の頭のようで、その口からは火と煙と硫黄とを吐いている。馬の口から出る火と煙と硫黄との三つの災難によって人間の三分の一が亡ぼされた。馬の力はその口とその尾とにあった。その尾は蛇のようであり、頭がある、それで害を加えるのである。その苦しみにによって亡ぼされなかった残りの人々は、自分の手の業をまだ悔い改めようとせず、悪魔たちと、見ることも聞くことも歩くこともできない黄金・銀・銅・石・木の偶像とを礼拝しつづけた。そしてかれらは、その殺害、魔術、淫行、盗みを改めなかった。」(9・13—21)

119 開かれた書 St. John with the book of the strong Angel

「天から下る一位の強い天使を見た。雲につつまれ、頭の上に虹があった。顔は太陽のようで、足は火の柱のようであった。手には、開いた小さな巻物を持ち、右足を海の上に、左足を地の上に置き、獅子がほえるような強い声で叫んだ。海と地との上に立っていた天使は、天に右手をあげて、世々に生きるお方、天と天にあるもの、地と地にあるもの、海と海にあるものをつくられたお方を指して、こう誓った、『もはや延期されることはない。第七の天使の声がひびき渡り、そのラッパが鳴るとき、神の叡義は、

その下僕である預言者たちがすでに示したとおり、実現するであろう。』また私が天から聞いた声が、『ゆけ、海と陸との上に立つ天使の手にある開かれた巻物をとれ』と私に話すのを聞いた。私は天使のもとに行き、小さい巻物を私にくれるようにと聞いた。かれは、『これを取って食べ。そうすれば、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘いであろう』といった。私が天使の手から小さな巻物をとってそれを食べると、また、『あなたは、また多くの人民・国・言葉・王に対して予言せねばならぬ』というものがあつた。」(10・1—11)

120 そして私は杖のようなはかり竿を与えられた

The measuring of the temple

「そして私は杖のようなはかり竿を与えられて、こういわれた、『立て、神の神殿と祭壇と、そこに礼拝する人々とをはかれ。神殿の外の庭は異邦人にゆだねられているから、はからずにさしおけ。そしてかれらは四十二カ月の間聖なる町をふみにじるであろう。』」(11・1—2)

121 二預言者 The two witnesses

『二人の証人に、荒袋を着て、千二百六十日のあいだ預言する権力を与えよう。かれらは地の主の御前に立つ二本のかんらんの木、二つの燭台である。かれらが預言の証明を終れば、深淵から上るけものがかれらと戦い、勝てかれらを殺すであろう。しかし、三日半ののち、神からくる生命の息がかれらに入ったので、かれらは足で立った。それを見たものは、非常な恐怖を感じた。かれらは、天からの強い声が『ここに上れ』というのを聞き、敵の目の前で、雲にのって天に上った。このとき大地震が起こり、町の十分の一は破壊され、七千人が死んだ。生き残った人々はおそれに打たれて、天の神に光榮を帰したのである。第二のわざわいはすぎ去った。第三のわざわいは、すぐ来るであろう。』(11・3—14)

122 第七の天使ラッパを吹く The seventh trumpet

「第七の天使がラッパを吹いた。天におびただしい声がかえり、『この世の国は、われわれの主とそのキリストとのものになった、かれは世々に君臨するであろう』といった。すると、神の御前の座についている二十四人の老人は、地にひれ伏して神を礼拝し、こういった、『主よ、今在り、かつて在られた全能のお方よ、あなたの御国を立てるために、その偉大な力をとられたことを感謝します。異邦人たちは怒りましたが、いまはあなたの怒りのときです。いま

こそ、死者を審かれる時、あなたの下僕である預言者、聖人たち、あなたの御名をおそれる小さな者、大きな者にむくいを与えられる時、また、地を腐敗させるものを亡される時です』。そうして、天にある神の神殿がひらけ、その中に契約の櫃が見えた。」(11・15—19)

123 太陽に包まれた婦人 The woman in travail

「壮大なしるしが天にあらわれた。太陽に包まれた婦人があり、その足の下に月があり、その頭に十二の星の冠をいただいていた。この婦人はみごもって、出産のなやみと苦しみのために叫びをあげていた。また天に、他のしるしがあらわれた。七つの頭と十の角をもち、頭に七つの冠のある赤い竜がいるのが見えた。そしてその尾で、天の星の三分の一をはきよせて地上に投げた。竜は、出産しようとする婦人の前に立ち、産むのを待ってその子を食おうと構えた。」(12・1—4)

124 天上の戦い War in Heaven

「そうして天にたたかいが始まった。ミカエルとその使たちは竜と戦い、竜とその使たちも戦ったが、しかし竜は敗れて、天にかれらのいる所がなくなった。大きな竜、すなわち悪魔またはサタンと呼ばれ、全世界を迷わすあの昔の蛇は倒され、地上に倒され、その使たちもともに倒された。」(12・7—9)

125 大鷲の翼 The flight of the winged church

「婦人は荒野のにがれたが、そこには、神がそなえられた避難所があった。地上に落されたのを知った竜は、男の子を生んだ婦人を追ったが、婦人には、荒野の自分の避難所に飛ぶために、大鷲の二つのつばきを与えられたので、蛇をはなれて、一時、二時、また半時のあいだ養われた。蛇はその口から川のような水を婦人の後に吐いて、水におぼれさせようとしたが、地は婦人を助け、その口をひらいて、竜がその口から吐いた川を吞んだ。竜は婦人に対して怒り、その子らの残りのもの、すなわち神のいましめを守り、イエズスの証明をもつ者に挑戦しようとしてでていった。」(12・6—13—17)

126 悪魔の挑戦 The diabolic trinity

「海から一つのけものがのぼるのを見た。それは十の角と七つの頭とをもっていて、角には十の冠、頭には冒瀆の名があった。けものは、豹のようで、その足は熊、その口は獅子のようである。竜はこのけものに自分の力と位と大きな権威とを与えた。地上に住む人々で、屠られた小羊の

生命の書に、世のはじめからその名を記されなかった人々は、みなかれを礼拝するであろう……。他のけものが地からのぼるのを見た。それは、小羊のような二本の角をもっていたが、竜のように話していた。」(13・1—18)

127 キリストの味方 The Lamb with the 144,000 elected

「小羊があらわれるのを見た。かれはシオン山の上に立って、額に小羊の名と御父の名を記した十四万四千人の人々を伴っておられた。かれらは、玉座の前と四つの動物と老人たちの前で、新しい歌をうたっていた。その歌は、地からあがなわれた十四万四千人の他は、誰にも学べなかった。かれらは、神と小羊とのために初穂として、人々の中からあがなわれたのであって、口にいつわりなく、汚れのない人々である。」(14・1—15)

128 福音を伝える天使たち The preaching angels

「天頂をとぶ他の天使をみた。かれは、地上にすむ者、すべての国と部族と言葉と民につげる、永遠の福音をもち、大声でこういった、『神をおそれよ、神に光栄を帰せよ、その審判のときがきたからである』。第二の他の天使は、つづいてきて、『倒れた、倒れた、……かの大バビロンは、ノ』といった。第三の他の天使は、『けものとその像を礼拝し、額または手にそのしるしを受ける者は、神の怒りのさかずに盛られた交りない怒りのぶどう酒を飲み、聖なる天使と小羊とのまえて、火と硫黄とに苦しめられるであろう。また白い雲を見た。その雲の上に、人の子のような方が坐り、頭に金の冠をいただき、手には鋭い鎌をもっていた。するともう一位の天使が神殿を出て、雲の上にすわるお方に向かって、大声に叫んだ、『あなたの鎌を投げて刈り入れて下さい、すでに刈り入れの時がきて、地の穀物はみのりました』。雲の上に坐るお方は、その鎌を地に投げた。そうして地の穀物は刈りとられた。同じく鋭い鎌をもったもう一位の天使が、天の神殿を出てきた。またもう一位の天使が祭壇から出てきた。これは火をつかさどる天使であって、鋭い鎌をもつ天使に大声に叫んだ、『ぶどうはすでに熟したのであるから、あなたの鋭い鎌を入れて、地のぶどうの木の房を刈り納めよ』。天使はその鎌を地になげて、地上のぶどうを刈とり、それをみな、神の怒りの大きな酒ぶねに入れた。町の外で酒ぶねを踏んだが、一千六百町のひろさにわたって、血が、馬のくつわにとどくほど酒ぶねから流れ出た。」(14・6—20)

129 水晶の海の賛歌 The victors on the sea of glass

「火の混じった水晶の海のようなものを見た。そして、けものとその像とその名の数とに勝った人々が、神の立琴をもって水晶の海のほとりに立っていた。かれらは、神のしもべモイゼの歌と小羊の歌とをうたっている、『全能の主なる神、あなたの御業は偉大であり、感嘆すべきものである、万国の王、あなたの道は正しく真実である。主よ、あなたの御名をおそれ尊ばない者があろうか、あなただけが聖なるお方である。すべての異邦人はあなたの審判の義をみとめて、み前にきて平伏するであろう。』」(15・2—4)

130 神の怒りの盃 The seven angels with the seven cups

「天に大きな驚くべき他のしるしをみた。それは、七つの災害を持っている七位の天使であった。これが最後の災害である。これによって、神の御怒りが遂げられるからである。天において証明の幕屋の神殿がひらかれた。そこから、七つの災害をもつ七位の天使が、清いまばゆい亜麻をつけ、胸に金の帯をしめてでてきた。四つの動物の一つが、世々に生きる神の怒りにみちた七つの黄金のさかずきを、七位の天使にあたえた。すると神殿は、神の光栄とその権力から立ちのぼる煙にみだされ、七位の天使の七つの災害が遂げられるまで、誰もそこに入れなかった。神殿から大きな声のでて、七位の天使に『神のいかりの七つのさかずきを地上に注ぎにゆけ。』といった。」(15・1—5—8—16・1)

131 第一の盃 The first cup

「第一のものがいって、そのさかずきを地上に注いだ。すると、けもののしるしをもち、その像を礼拝する人々に、苦しい悪性の腫物ができた。」(16・2)

132 第二の盃 The second cup

「第二のものがそのさかずきを海に注ぐと、海は死者の血のようになり、海のいきものはみんな死んでしまった。」(16・3)

133 第二の盃 The second cup (continued)

十字架の立っている位置と現代の世界情勢との対比に注目。

134 第三の盃 The third cup

「第三のものが、そのさかずきを川と水源とに注ぐと、それらはみんな血になった。そして水源を司る天使がこういっているのを聞いた、『今在り、かつてあられた聖なるお方よ、あなたは正義である。なぜなら、この裁きを果たされたからである。聖人たちと預言者の血を流した人々に、

あなたは血を飲ませた、かれらはそれを受けねばならぬ者である。』また、祭壇が、『そうだ、主なる全能の神よ、あなたのさばきは真実で正しい。』といった。」(16・4—7)

135 第四の盃 The fourth cup

「第四のものがそのさかずきを太陽に注ぐと、太陽はその熱で人間をやくことをゆるされた。こうして人間は非常な熱に焼かれた。かれらは、この災害を思いのままにつかう神の御名を冒瀆し、改心して神に光栄を帰そうとしなかった。」(16・8—9)

136 第五の盃 The fifth cup

「第五のものがそのさかずきをけものの座の上に注ぐと、けものの国は暗くなり、その部下は苦しみの余り舌をかみ、その苦しみと、腫物とのために天の神を冒瀆し、自分たちの行ないを改めようとしなかった。」(16・10—11)

137 第六の盃 The sixth cup

「第六のものがそのさかずきを大なる川に注ぐと、東から来る王たちの道を準備するためにその水は涸れた。また竜とけものと偽預言者との口から、蛙のような三つの汚れた霊が出るのを見た。悪魔の霊は不思議を行ない、全能である神の偉大な日の戦いのために、全地の王たちのもとにいて、かれらを集める。」(16・12—16)

138 第七の盃 The seventh cup

「第七のものがそのさかずきを空中にそそぐと、王座からでる大きな声が神殿からひびいて、『事は終わった』といった。そしていなずま、声、かみなりが起こり、大きな地震があった。地上に人間が住んで以来、これほどの大地震が起こったことはなかった。大きな町は三つに裂かれ、異邦人の町々は倒れた。そして神は、その御怒りのぶどう酒のさかずきをさずけるために、大なるバビロンを思い出された。すべての島は逃げ、山はもう見えなかった。そして非常に大きな雹が天から人々の上に降り、人々は雹の災害のために神を冒瀆した。その災害が非常に大きかったからである。」(16・17—21)

139 緋色の獣に坐る淫婦 The great harlot sitting on the scarlet beast

「七つのさかずきを持つ七位の天使のひとりがきて私にいった、『近よれ。私は、大きな水のほとりに坐っている大淫婦へのさばきを見せよう。地上の王たちはこの女と淫行し、地上に住む人々は、この女の売淫のぶどう酒に酔っ

た。そのけものの体は冒瀆の名でおおわれ、七つの頭と十の角とがあった。紫色と緋色の衣をつけ、金、宝石、真珠で飾ったその女は、憎むべきものとその淫行のけがれとに満ちた金のさかずきを手にもち、そのひたいには名があった、それは奥義である。『大なるバビロン、地上の淫婦と憎むべき者との母』。そして、この女が、聖人たちとイエズスの殉教者たちとの血に酔っているのを見た。』 (17・1—6)

140 バビロンは悪魔と汚れた霊の住居となった Babylon, abode of devils and unclean spirits

「天から下っているもう一位の天使を見た。かれは非常な権力をもって、地上はその光に輝いた。そしてかれは力よく叫んでいった、『倒れた、倒れた、大なるバビロン、それは悪魔の住居、すべての不浄な霊とすべての汚れた厭わしい鳥とのすまいとなった。天からもう一つの声が出て、こういうのを聞いた、『わが民よ、町を出て、その罪に与らず、それを打つ災難を受けるな。』』 (18・1—2…4)

141 バビロンの悲嘆 Lamentation over Babylon

『すべての船長、沿岸航海者、水夫、海で生きる人々は、はるかに立って、その火の煙を見て、“どんな町が、この偉大な町に比べられよう、”というであろう。そして頭に塵をかぶってかれらは泣き叫び嘆く、“ああ気の毒に、偉大な町、その奢りによって、海に船をもつ人々はみな富を得た、それが、またたく間に亡びるとは”』。すると一位のつよい天使が、大きなひき臼のような石をもち上げ、海に投げていった。『偉大な町バビロンは、このように一投で投げすてられ、ふたたび現れないであろう。』 (18・18—19…21)

142 天上の喜び Joy in Heaven

「天に、大群衆の大声を聞いたが、それはこういていた、『ハレルヤ。救いと栄光と勢力とは、われわれの神のものである。その審きは、真実で正しい。自分の売淫によって地上を汚した大淫婦を神はさばいて、その下僕たちの血の復讐をなされた。』。また、『ハレルヤ、その町の煙は永遠にたちのぼる。』。すると、二十四人の老人と四つの動物とはひれ伏して、玉座に坐る神を礼拝し『アメン、ハレルヤ、神、万物の支配者である主は、王位についた。よろこびいさもう、かれに栄光を帰そう。』 (19・1—7)

143 王の王 The white Horseman

「天がひらくのを見た、そして一頭の白い馬があらわれ

た。それにのっておられるお方は忠実なもの、真実なもの、とよばれ、正義をもって審きまた戦われる。その目はもえる火のようで、その頭にはさまざまな冠をいただき、またかれ以外の誰にもわからない名が記されていた。かれは、血にひたされた外衣をまとい、その名は『神の御言葉』という。天の軍勢は、白く清い麻布をつけ、白馬にまたがってかれにつき従っている。かれの口からはするどい剣が出ていて、それで諸国の民を打ち、鉄の棒でかれらを治め、そして、全能の神の激しい怒りのぶどう酒の酒槽をふまれる。その上衣と股とに『王の王、主の主』という名が書かれていた。太陽の中に立っている一位の天使を見た。かれは声高く、空飛ぶすべての鳥にいった、『神の大宴会にあつまれ。王たちの肉、千夫長の肉、英雄の肉、馬とそれにのる者の肉、すべての人、自由民と奴隷、小さなもの偉大なものの肉を食え。』 (19・11—18)

144 火の池 The beast and the false prophet thrown into a sea of fire

「けものと、地上の王とその軍勢とが集まり、馬にのっておられるお方とその軍勢とに対して戦いを開くのを見た。けものは捕えられ、またそれとともに偽預言者も捕えられた。—かれはけものにつかえて不思議を行ない、それによって、けものしるしを受けた者とその像をおがむ者とを迷わしたのである—その二つとも、生きながら、硫黄のもえる火の池に投げこまれた。ほかの者は、馬にのっておられるお方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥は、その肉を飽きるまで食べた。』 (19・19—21)

145 サタンの幽閉 Satan in chains for a thousand years

「一位の天使が、天から下るのを見た。かれは、深淵の鍵と大きなくさりとを手にもち、竜、すなわち悪魔でありサタンであるあの昔の蛇を捕えて、千年の間つなぎ、深淵に投げこんで閉じこめ、その上を封じ、千年がすぎるまで異邦人を迷わせないようにした。』 (20・1—3)

146 千年間の至福 The millenium spiritual reign of the Church

「座を見た。そこには、裁く権力を受けたものたちが坐っていた。かれらは、イエズスの証認と神の御言葉とのために、頭をはねられた人々の霊であって、けものとその像を礼拝せず、その印を額と手にうけなかった人々である。かれらはキリストとともに千年のあいだ生きて司った。これが第一の復活である。その他の死者は千年がすぎるまで

生きかえらなかつた。第一の復活を受ける者は、幸な者、聖い者であつて、かれらに対しては、第二の死は権威をもたないのである。かれらは神とキリストとの司祭として、キリストとともに千年のあいだ治めるであろう。」(20・4—6)

147 サタンへの叛逆 Satan's personal defeat

「千年がすぎると、サタンは牢獄をとき放たれ、地上の四隅にある国民を迷わしにいくであろう。それらの国々を戦いのために集める。その数は海の砂ほどもある。かれらは地のおもてにあまねく上り、聖人たちの陣営と、愛された町とをとりかこんだが、天から火が降ってかれらを焼きはらった。そしてかれらを感わした悪魔は、火と硫黄との池に投げられたが、そこには、けものと偽預言者とかいて、世々に昼夜を問わずかれらを苦しめられるであろう。」(20・7—10)

148 最後の審判 The Last Judgment

「白いおごそかな座と、そこに坐るお方とを見た。天も地も、その御前からあとを残さないほどの遠くにのがれた。また、小さい者も偉大な者も、すべての死者が玉座の前に立っているのを見た。そして数多の書がひらかれ、またもう一つの書がひらかれた。それは生命の書であり、死者は、これらの書の内容にしたがい、おのおのおこないによってさばかれた。そして海はそこにいた死者たちを返し、死も冥府もそこにいた死者たちを出した。そしてかれらは、その行ないにしたがつて、裁かれた。すると死と冥府とは火の池に投げこまれたが、火の池は第二の死である。そして生命の書に記されていなかった者は、みな火の池に投げこまれた。」(20・11—15)

149 新しいエルサレム The new Jerusalem sent down from heaven

「新しい天と新しい地とを見た。前の天と前の地とはすぎ去り、海ももうない。そして、聖なる町、新しいエルサレムが、花むこのために装った花よめのように、天から、神のみもとから、下るのを見た。そのとき、玉座からでる大声がこういうのを聞いた、『人間とともにある神の幕屋がこれである。神は人と御自分との住居を定めるであろう。人は神の民となり、“人とともにある神であるかれ”は、人の神であろう。神は人間の目の涙をすべて拭われ、死ももうなく、悲しみも、叫びも、苦勞もないであろう。なぜなら、前のものがすぎ去ったからである』。すると玉

座に坐るお方は、『私は、すべてを新にする。事は実現した。私はアルファとオメガ、始めと終りである。渴く者には、無償で生命の水の泉を飲ませるであろう。勝つ者は、そのすべてを受けるであろう。私はかれの神となり、かれは私の子となるであろう』。また天使がきて、『近よれ、私は、小羊の妻である花よめを見せよう』といった。そしてかれは、霊を高い大きな山につれていき、天から、神のみもとから下る聖なる町エルサレムを見せた。その町は神の光榮をもち、そのかがやきは非常に貴い宝石に似て、水晶のようにすきとおった碧玉のようであった。その町には大きな高い城壁と十二の門があった。それぞれの門には十二の天使の一位と記された名とがあった。町は四方形で、長さと同幅である。そして、潔くない者、厭わしい者、いつわる者は、誰もここに入れない。ただ小羊の生命の書に書かれている者だけが、入るであろう。」(21・1—27)

150 新約は聖体の設立で封印される

The New Testament sealed by the Eucharist

画面の中心は最後の晩餐で、テーブルは十字架上のイエズスの腕にからむ羊皮紙である。新約を録した羊皮紙の末端には聖体の印をもつ封印がある。この封印(聖体)が羊皮紙の新約を保証する。晩餐には宗教上の各種の意義を含んでいる。背景は教会堂の正面。右手のイエズスは画面全体を自分の方へと引きよせる。左側は聖霊降臨、右側にはイエズスの苦難を分かち信徒が見える。前面にある十字架と教会堂の下にはローマの聖ペトロ聖堂のキューポラ。

死の舞踏シリーズ Danse Macabre-Series

社会のあらゆる階級や年齢に関係なく、死の威力を骸骨の舞踏などで表現したもので、登場するものは皆、顔は骸骨である。この手法は十四世紀頃ヨーロッパに流行し今でも南アメリカとくにメキシコではやっている。デレスは社会情勢を諷刺、批評するために死の舞踏シリーズを描いた。

151 DD 1 無題 (1939) Untitled

152 DD 2 アコーディオンをひく女 (1939)
Accordion player

153 DD 3 詩人 (1939) The Poet

154 DD 4 獵 (1939) Hunting

155 DD 5 春 (1939) Spring

156 DD 6 許婚者の男 (1940) The betrothed

157 DD 7 接吻 (1940) The kiss

158 DD 8 馬 (1940) Horse

159 D D 9 牛 (1941) Oxen

160 D D 10 “採用されなかった版画” (1941)
Rejected Woodcut

1939年11月シカゴで行なわれた第7回国際版画展覧会に自信をもって出品した作品が採用されなかった。そこでデレスはこの版画を彫って審査員たちの目のなさを諷刺した。

161 D D 11 鹿 (1941) Deer

162 D D 13 猫 (1941) Cat

163 D D 14 死の舞踏のイントロダクション (1942)
Introduction to the Danse Macabre

164 D D 15 冬 (1943) Winter

陰鬱な作品。独ソ戦のイメージ。ある人が巣の中から乾からびた小鳥をもってきた、彼はそれをモデルとした。白い雪の上に折れた枝、死骸、壊された戦車などが散在する冬景色。

165 D D 16 中世紀 (1943) Middle Ages.

166 D D 17 見ざる聞かざる言わざる (1942)
“Don't look, don't hear, don't speak”

167 D D 18 衆愚 (1945) Herd-spirit

168 D D 19 原子力主義の二十世紀 (1946)
Atomism XXth century

169 D D 20 “To be, or not to be” (ハムレット) (1948)

170 D D 21 金のスケルゾー (1948) Golden scherzo

171 D D 22 獅子と犬 (1948) Wild boar and dogs

172 D D 23 パルチザン (1948) The partisan

パルチザンに巣喰う分裂。頭蓋骨の半分は天使に守護されるが、残りは貧欲な経済と科学に支配される。

173 D D 24 「神は存在せず」 “God does not exist”

ディエゴ・デ・リベラーメキシコの画家—に対する諷刺画。リベラはこの言葉をナショナル・ホテルの壁画に描いた。が、後にカトリック大学生たちの手で塗りつぶされた。ステージの上で混血児のダンサー（これはリベラの絵の模写）の背中にラミレス（哲学者）「神は存在せず」と説いた」がしがみつき、ラミレスの「神は存在せず」の著書を足で開いて見せる。リベラはそれを見ながら「神は存在せず」の曲をアコーディオンで演奏する。

174 D D 26 美術と科学 (1949) Art and science

無限に続く頭蓋骨は黒い道となる。 $2 + 2 = 4$ という簡単な真理から、ピタゴラスの定理、ニュートンの公式、ア

インシュタインの原子力説、プランクの図式を通じて遂に原子爆弾が生まれた。すべては科学という木の側で行なわれる。科学の架け橋として、十字架の形の花をもった若いマンモス。左側には美術に満ちているが、ほとんど死に絶えた都会がある。

175 D D 28 七つのベール (1949) The seven veils

176 D D 29 クーガル (1949) Puma

177 D D 30 死の舞踏と私 (1950)
The danse macabre and me

二つの頭が頭蓋骨を支えて、後頭骨に接する。この二つの頭も皆自画像である。視覚、聴覚、味覚、嗅覚、および理性はそれぞれの頭によって象徴され、強調される。たとえば視覚を象徴する頭は、とくに目を強く描いている。

178 D D 31 Nディメンショナリズム (1955)
N dimensionalism

ピカソやその亜流の追随者は四次元の物を三次元の半面上に展開する。デレスはそれを諷刺して上部に、さらに下から上を見た五次元を描きこんだ。

179 D D 32 イプノペディ (1956) Hypnopedy

180 D D 33 真の謝肉祭 (1956) The real carnival

謝肉祭の仮面と荒野（三つのサボテン）に祈るイエズスとイエズスの断食との対比。無意味な矛盾に満ちた謝肉祭の、飲めや歌えの酒宴とを対比させる子供の手から仮面を取りあげようとするが、子供はすでに仮面をこわしている。

181 D D 34 サイバネティクス (1956) Cybernetics

182 D D 35 ディオゲネスのランプ Diogenes' lantern

シノベのディオゲネス（B, C 323項）は真の人間を見つめるため昼間でもランプをつけて歩いた。しかし彼が出会ったのは、我利我利亡者や、あやつり人形のような者ばかりだった。

183 D D 36 ヘロデの伝説 (1956) The Herod legend

ヘロデに殺された嬰兒たちがクリスマスCarolを歌いながらヘロデの墓にやってくる。ある家の近くにくると堕胎された子供の霊魂が家から出るのを見た。ヘロデは大声で“私は王として殺したが、この人は母として自分の子どもを殺した”と叫んだ。

184 D D 37 ぬけがら Exterior skeleton

185 D D 38 三段階 The three stages

アルゼンチン千一夜物語シリーズ

1001 Argentinian nights-Series

デレスは民話にはあまり興味を持たなかったが、J. D. ルセロ著「アルゼンチン千一夜物語」(アルゼンチン民話集)を読み、幻想的な民話に魅せられ、空想に駆り立てられ、このシリーズの作品を作った。彼の意欲を刺激した物語の梗概を述べるスペースのないのは残念である。

186 靈魂のぬけがら (1952) Body without soul

物語の主人公は、この地方の暴虐な支配者の生命を宿す卵に立ち向かって行く。彼を愛する女一支配者の侍女一は英雄の勝利を祈っている。

187 黒人トライアングロ (1952) The negro Triangulo

七人の小悪魔に拐される男。右端に立つのがトライアングロで、彼の手にする紙は、悪魔につれさられて行く男が書いた靈魂壳渡証。

188 (承前) (1952) The negro Triangulo

拐された男の息子は、魔法のかけられた谷を通り抜けて、父をとり戻しに行く。

189 正直者ジョン (1952) John the honest

正直者ジョンは黄金の角をもつ牡牛の飼育を約束する。が、少女の目の前でこの牛を殺す。もはやジョンは正直者ではない。

190 三人の盗人 (1952) The three robbers

二人の泥棒は、泥棒志願の男に稼業のコーチを約束する。しかしこの志願者は金持の娘と結婚し、以前の親方をつかまえようと追跡する。口にローソクを、尻にもローソクをつけた男が背後に迫る。

191 悪い見張り (1952) The bad watchman

悪い監視人(右上)は魔法使いの宴会を罰しようとする天使たちを押しとめる。前景に、猫に変えた魔法使いをあやす悪魔。

192 (承前) (1952) The bad watchman

悪い見張り人は馬に変えられて吊されている。魔法使いは彼を呪う。

193 何処へ、君帰らず (1952) Where you go to, and never come back from

飼犬と馬とに手伝ってもらい、怪物一美しい娘を呑みこもうとする一を退治する物語の主人公。

194 (承前) (1952) Where you go to, and never come

back from

化石した風景。建物の入口に立つのは犠牲の老人、弟が老人を助けに行く。

195 オレンジの樹の聖人 (1952) The Saint of the orange tree

彫刻家を装った浮浪者が、立派なオレンジの樹を彫って像を造ると言うので、この家の主人は彼を優遇する。浮浪者は楽しい日々を送る。しかし約束の聖人像はうまく彫れない。彫る程に、できるのは木屑ばかり。残ったのは一本の棒。腹を立てた主人はこの棒で浮浪者を叩き出す。

196 半人半獣 (1951) Half man and half beast

物語の主人公の父は悪魔と契約して息子を勘当する。奇妙な姿の老人のみなりをした神は、悪魔の目の前で息子を善悪の二つに切り分ける。善い方の半身は悪の半身を悪魔から奪い返すのに数々の辛酸をなめる。

197 (承前) (1952) Half man and half beast

198 素晴らしい報酬 (1952) The clever negro

怠け者だが頭のよいニグロは、主人の友人の許へ手紙を届けに行かされる。友人は素晴らしいお返しをくれる筈だと主人はいう。途中でニグロは仲間の男に会い「手紙を届けると沢山お礼がもらえる」という。仲間の男は彼の代りになって手紙を届けたが、もらったものは手荒いもてなしだった。

199 ホアリランの三つの塔 (1951)

The three towers of Hualilan

父親は息を引きとった。母と子は傍に坐って慰めあう。

200 (承前) (1922) The three towers of Hualilan

北風と南風(兄弟)の激突。

201 (承前) (1952) The three towers of Hualilan

202 ニグロの解放 Freedom of the negro

主人は「何も着ずに一晩中冷たい山の頂きで過せば、お前に自由を与えよう」と言った。「寒くないのだ、寒くないのだ」と己に言いかけながら一糸まとわず山上で一夜を過したが……。

203 「恩知らずの家鴨、覚えているか？」 (1951)

"Ungrateful duck, do you remember?"

森の中で魔法使いの娘フロルチータを誘拐するモルチート。魔法使いはそのしかえしに、モルチートに魔法をかける。彼は恋人フロルチータを見ても、それと判らぬほど正気を失ってしまうが、夢の中で娘はモルチートに事の次第

を告げる。彼は次第に意識を取りもどす。

204 (承前) (1951) "Ungrateful duck, do you remember?"

建築に関するノスタルジャ・シリーズ

Architecture and nostalgia-Series

このシリーズは建築的な要素からなっている。彼がこのシリーズを作った理由は、近代主義の人々がその古い様式を充分尊重しないから、それが昔あった平和的な雰囲気を感じおこさせるためである。

205 A N I

206 A N II

207 A N III

208 A N IV

209 A N V

210 A N VI

211 A N VII

212 A N VIII

213 A N IX

214 A N XI

215 A N 国立博物館の立像の記念

Souvenir of the "National Museum of Monuments"

ピエドラ・シリーズ Piedra-Series(="Stone"-Series)

彫刻を眺めながら、そのインスピレーションに基づいて作ったのでピエドラ(石)シリーズと言う。このシリーズの大部分はデレスの刻んだ彫刻によって作られた。

216 P 1 眠れる三婦人 The three sleeping women

217 P 2 母と子 Modern maternity

218 P 4 追想する婦人 Retrospective walker

219 P 5 天使像のある二階層の市街

Angel on a two-storied house

220 P 6 プーシキン・フーガ・ファンタジア

Fuga Fantasy about "The statue of Pushkin"

221 P 7 有史以前の交通 Prehistorical traffic

222 P プロメティウス Prometheus

コンポジション Compositions

223 C S 1 Composition

224 C S 2 Composition

225 C S 3 Composition

226 C S 4 Composition

227 C S 5 Composition

228 C S 6 Composition

229 C S 7 Composition

230 V 33 Composition

H・C・Cシリーズ H・H・C-Series

チャクラス・デ・コリア (彼の居住地の住人)

231 V 5 五重像 作者の自画像 Quintuple portrait of the artist

232 V 45 姉妹 (1938) Two little sisters

233 V 67 自画像 Self-portrait

234 V 80 LとV (1943) Liske and Victor

235 V 83 リスケ Liske

236 V 90 ノリタ Norita

237 V 92 ホセ・ルイスとセバスチャン (1944) Jose-Luis and Sebastian

238 V 96 アルフレド Alfredo

239 V 103 マリオ・レージス (1946) Mario Regis

240 V 105 交代ポートレート (1946) Rotating Portrait

241 V 106 交代ポートレート (1946) Rotating Portrait

242 V 107 交代ポートレート (1946) Rotating Portrait

243 V 111 啞 (1949) The mute

244 V 113 カルメン Carmen

245 V 118 クリス (1948) Kris

246 V 129 ドン・アロンソ (1949) Don Alonso

247 V 130 ドナ・バスカ Dona Pascua

248 V 140 カストロ Castro

249 V 242 「一を聞いて十を知る」

"A buen entendedor medio grabado basta!"

250 V 267 ドン・ホセ Don José

251 V 282 アマリア Amalia

252 V 293 マリオ (1957) Mario

253 V 294 クリス (1957) Kris

254 V 295 アイキシタ (1957) Aixita

255 V 296 クラウディア (1957) Claudia

256 V 自画像 Self-portrait

肖像画シリーズ Portrait-Series

257 V135 サン・マルチン (1950) San Martin

アルゼンチンの偉大なる英雄。

258 V149 聖者 デ・モンフォール

Saint L. M. Grignon de Montfort

259 V257 尊者 マルセラン・シャパニャー

Venerable P. M. Champagnat

260 V339 セフェリーノ・アマンクラ

Ceferino Amancura

261 V 王 The King

次の十五枚の版画はデレスが二十三歳の時に発表したものである。

262 (1) 母像 Portrait of Delhez' mother

263 (2) 母の死 Mrs. Delhez on her deathbed

264 (3) 自画像 Self-portrait

265 (4) 木 Trees

266 (5) 家 House

267 (6) 宇宙発生 Cosmogony

268 (7) モーター Motor

269 (8) 山羊 Goats

270 (9) 猿 Monkeys

271 (10) 猫 Cats

272 (11) 羊 Sheep

273 (12) おうむ Parrots

274 (13) 犬 Dog

275 (14) たつのおとしご Sea Horses

276 (15) ふくろう Owls

ミセレーニャ Miscellanea

277 風景 Landscape

278 コルドバの粉挽場 Old mill at Cordoba

279 散歩 Walk

280 情熱家の談話 "Triloquio apassionado"

281 けんか腰 "Triloquio irracundo"

282 定義 Definitions

283 風景 Landscape

284 無拘束 Unconstraint

285 無題 Untitled

小品

286 V222 強壮剤 Tonic

287 V229 無題1 Untitled 1

288 V248 詩人 Poet

289 V249 無題2 Untitled 2

290 V251 新十二宮 Neo-zodiac

291 V279 無題3 Untitled 3

292 V281 無題4 Untitled 4

293 V282 無題5 Untitled 5

294 V284 無題6 Untitled 6

295 V285 無題7 Untitled 7

296 V286 無題8 Untitled 8

297 V287 無題9 Untitled 9

298 V288 無題10 Untitled 10

299 V289 無題11 Untitled 11

300 V290 無題12 Untitled 12

301 V291 無題13 Untitled 13

302 V302 無題14 Untitled 14

303 V337 無題15 Untitled 15

304 V359 無題16 Untitled 16

305 V359 無題16 Untitled 16

306 V367 無題17 Untitled 17

307 V367 無題17 Untitled 17

308 V372 無題18 Untitled 18

309 V373 無題19 Untitled 19

310 V374 天使たち Angels

311 V377 聖墓地における婦人たち The holy women at the Sepulchre

312 V377 聖墓地における婦人たち (明緑色)
The holy women at the Sepulchre

313 V380 天使 Angel

314 V384 御降誕 Christmas

315 V385 御告げ Annunciation

316 V386 無題20 Untitled 20

317 V388 無題21 Untitled 21

318 V396 無題22 Untitled 22

319 V408 マーキュリー Mercury

320 V409 無題23 Untitled 23

321 V410 無題24 Untitled 24

- 322 V411 白い道 White road
- 323 V412 小舟 Skiff
- 324 V413 木 Trees
- 325 V415 強壯剤 Tonic
- 326 V420 天使たち Angels
- 327 V421 船 Steamer
- 328 V422 無題25 Untitled 25
- 329 V423 新十二宮 Neo-zodiac
- 330 V424 風景 Landscape
- 331 V444 猫 Cats
- 332 V445 無題26 Untitled 26
- 333 V448 詩人 Poet
- 334 V451 ミクロ・スケルディーノ I
Microscherzino 1
- 335 V452 ミクロ・スケルディーノ II
Microscherzino 2
- 336 V453 ミクロ・スケルディーノ III
Microscherzino 3
- 337 V454 ミクロ・スケルディーノ IV
Microscherzino 4
- 338 V457 ミクロ・スケルディーノ V
Microscherzino 5
- 339 V456 ミクロ・スケルディーノ VI
Microscherzino 6
- 340 V455 ミクロ・スケルディーノ VII
Microscherzino 7
- 341 V 新十二宮 (大) Neo-zodiac
- 342 V 太陽 Sun
- 343 V 無題27 Untitled 27
- 344 V つながった平面 Articulated plans
- 345 V 風景 Landscape
- 346 V 無題28 Untitled 28